

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和五十年一月二十五日 印刷
昭和五十年二月一日発行 (毎月一日発行)
創刊大正十三年 通卷五七三号



No. 573

二月号

姉妹品大和錦印

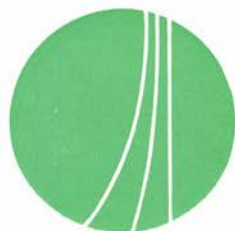


柔道衣 剣道具

警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

早川繊維工業株式会社
大 阪 支 店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電 話 (779) 1690~2番



川柳塔社同人の
胸にかがやく
シンボル・マーク

一個千円（桐箱入り） 送料本社負担

● 川 柳 塔 社 同 人 句 集 ●

『 川 柳 塔 』

頒 価 1500 円 送 料 160 円

着眼大局

大八洲何やら吃りながら明け

まばたきもせずしきたりを守りぬき

着飾って袋小路の冬の雨

本年もよろしく爽やかにそらぞらし

神仏におまかせ余世長すぎる

庵々生島中

将棋の升田さんは、色紙を乞われると、「着眼大局、着手小局」とよく書かれたそう
だ。盤面の大局に目をそそぎながら、着手は
小局から慎重にという意であろう。ことし、
正月、どうした事か、この升田さんの言葉が
思い出されてならなかった。去年の秋から年
末にかけては、やれ金つまりだ、やれ不景気
だ、物価高だと、右往左往の街のさなか、大
阪の新歌舞伎座の山本富士子や、京都の顔見
世に行ってみると、補助席まで出しての超大
入満員。それが一歩外に出ると寒風にさらさ

れて、戎橋筋や四条の橋詰では、救けあいの
義捐金箱がならんで声をからして居るではな
いか。世の中の、どこかが狂うたハーモニ
ーを感じないわけにはゆかぬ。勿論、川柳界の
事情とは異なるものがあるとはいえ、こうした
破調の影響は防がねばならぬし、又こうした
ものに馴れっこになつてはならぬと思った。
着眼大局、着手小局という見地から言つて、
日本川柳協会の今度の発足は大きな使命と意
義があると思う。

川柳塔二月号

川柳塔二月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

座右の句

地下街を悠々すかたん歩いてた

(静馬)

私の句

雨宿りうっかり踏んだ自動ドア

室谷 徹舟

着眼大局

肩書

誹風柳多留廿五篇研究

(五)

清 博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原 亮
鈴木 黄・室山三柳・入江 勇・岡田 甫

川柳塔(同人作品)

水煙抄

麻生路郎物語

(2)

50年度二賞候補作品中間発表

秀句鑑賞

(同人吟)

書評「聴診器」

(水煙抄)

近作

百人一首と川柳(8)

中島生々庵 (1)
不二田一三夫 (2)

中島生々庵選

川村好郎選

東野大八

若本多久志

菊沢小松園

戸田古方

諸家

富士野鞍馬

肩書

代打要員 不二田一三夫

本号縮切ギリギリになって、この原稿が書けなくなったという電話がはいった。この方は肩書きが多いので、いつもご多忙のようであった。

さて、今から電話して、明日にでも届けてもらえる人となると、さうどなたにもご無理なことを頼めない。そこでまたぞろピンチ・ヒッターの出番となったわけ。

新年句会は足場がわるいのには85名という盛会だった。数カ月前から句会のお手伝いは解任してもらっているのに、やっぱりなにやかと忙しく句を出す時間にも追われていた。

そんな時、敏さんがぼくを呼んでいる。面会者が来ているというのだ。

「神崎敏雄さんです」と敏さんが紹介してくれた。11月号の後記に、タバコ行列のことを書いたが、その拙文の中へ出てくる共産党所属の政治家である。ぼくは生まれつき、大先輩にも後輩にも「言葉つき」は一手販売である。だから大先輩には無礼な言辭を弄し、

酒
雑筆春秋

直原七面山・中川晃男・古川鶴声・谷垣史好・
本多柳志・関 美子・山添眉水・橋高薫風

麻生葭乃

(39)

鉄児さんを偲ぶ

もう聞けぬしわがれ声

句(苦)作

一分間の柳論

雅号ぶっちゃけばなし

初歩教室

大萬川柳「扉」

柳界展望

本社一月句会

各地柳壇(佳句地10選)

一路集「雄弁」

雪景色

編集後記

浜野奇童

(46)

不二田一三夫

傍島静馬

藤村メ女

鈴木村諷子

本田恵二朗

川村好郎選

(庸佑・整理)

竹内翁童

竹内翁童選

山内静水選

尼緑之助選

(二三夫・葉子)

(65)

(60)

(48)

(49)

(48)

(54)

(52)

(50)

(51)

(53)

座右の句

食膳に掌を合わすここからの生活

私の句

手さぐりの世へ凡悩の骨が折れ

(好郎)

桑原喜風

後輩にはいいねい過ぎて小馬鹿にしたように
とられることがあるらしい。そんなわけで神
崎氏にもベラベラしゃべったあと、名刺を見
ると「日本共産党 衆議院議員」とあって
「アンタ」を「センセイ」と云うべきであっ
たかも知れなかったようである。

ぼくもよく「肩書き」をたずねられること
がある。新聞や雑誌に雑文を書く場合、「肩
書き」をどう書くかというのだ。そんなと
きはきまって「そこは適当に、なんでもよろ
しい」ということにしている。

そこで、いったいぼくはなんだろう?と、
スクラップ・ブックを見る気になった。

作家・漫才作家・随筆家・標語研究家・コ
ント作家・川柳家・劇作家とある。どれ一
つ固定したものがないということは、どれも
これもニセモノということになるうか。

若いころは「活動屋」といわれたことがあ
った。今の「活動家」ほどアタマがよくない
活動屋(映画人)である。「映画」を「活
動」というとスゴクむかし人間のようなが、
当時の活動屋といえは、ちょっとイキな存在
だったのである。ちなみにぼくの名刺には
「月刊・漫才・川柳塔編集」となっている
が、目下漫才誌は冬眠中だから、この看板に
偽りありか。



中島生々庵選

富田林市 岩田美代

良心に聞いても答えのない恐怖

諦めた心は笑うてばかり居る

手袋が霜を掴んで落ちている

彩足袋に替えて私の忙しい

京地藏院にて

真っ青に冬竹思いつめている

島根県 堀江正朗

見えぬけど心豊かな灯をともし

掃除器とまるく歩いて日が暮れる

髭そっただけのおしゃれで妻に逢い

顔いっぱい受けた朝日に手をあわせ

生きている倅せ妻よ初春がくる

大阪府 金井文秋

仕事の鬼と云われた過去も老いを知る

マンネリであろうと好きでやってます

いつまでも若くありたい一万歩

メリハリが効いて聴きてを飽かさない

バリカンを買う気になった子沢山

青森市 工藤甲吉

我が輩は猫で柔和な顔をする

虎の威を仮りてもひとは驚かず

母急逝（十一月十七日）八十六才

一生を働き抜いた骨拌む

亡妻一周忌（一月九日）

一周忌愛別離苦のしたたかに

何をくよくよと遺影に叱咤され

香川県 三井醉夢

日舞の会

きれいだとはめられ一つ物足らず

眉引の顔師きびしいかおを持つ

団十郎娘

娘は二十恋のしぐさはほんものか

鶴の寿

素踊りの扇は二つ鶴になり

大金を投じて残るものはなし

岡山県 浜田久米雄

身構えて見ても値上げに流される

鉄児さんを悼む(一句)

十月に逢うた面影とは悲し

起こされる電話がかかる十二月

なにか嘯みながら出て来る電話口

暗闇の度胸殺陣型になり

倉吉市 奥谷弘朗

老いたのか次々欲を捨てはじめ

のびのびと創る心を育てたし

気安めに縁起かついで見るも年

そっとして置くより外にない波紋

あげ足を取るひらめきは別に持ち

泉大津市 村上春巳

姉の死

目をつむる間際に姉の苦労性

せてもの救い仏が笑うてる

雨無情柩の白を濡らすまい

落ちそうな涙奥歯で嘯みしめる

茶をすすする間に灰となる無情

松山市 谷のぶお

六方は切れずピエロ幕に入り

倒産の心配のない底に住み

麗人の果ての姿の枯れ芙蓉

両眼がは入った達磨迷いだし

一すじの道定年で行き詰まり

東京都 山根白星

喪章とりながらはんばな午後となる

もうかえらない恋借りたままの本

寝たきりのおむつに神はおわすのか

ガウン手を通さぬままの倦怠よ

念入りに見られ定期も意地となり

出雲市 尼緑之助

からっぱのバスで不況を訴える

軒並みの不況へポーンナスの壁

狂乱の渦は声なき声でなく

両柳人の叙歎

古稀清秋輝くものに黜五等

草丘君新築

ころろよいねざめよ木の香畳の香

桜井市 岩本雀踊子

じき消える噂を気にするお馬鹿さん

もう泣かぬ女になった不仕合せ

大将と云われて道を尋ねられ

一番の電車で都会に着く稼ぎ

十二月の風に背をたたかれる

宝塚市 傍島静馬

お育ちがお茶菓子にらんでいるばかり

云えば拗ね云わずにおれば何もせず

ペンペン草枯れても屋根にしがみつ

晚鐘をおセンチに聞く一人旅
裸からやる氣へ職場事欠かず

松江市 中川晃男

言訳の途中我から嫌氣さす

音痴聞きつつ自分もこんなかと思ひ

水に流した筈を酒で思い出し

仏像の方から私に眼を伏せて

正札が二人の夢に水をさし

倉敷市 野田素身郎

子の編んだマフラーごつごつして温し

十二月小鳥の餌をまた忘れ

迎合をしてまで喝采得たいのか

嫁がせて琴の音絶えるお正月

正月から逆算をして手術受け

愛媛県 渡辺曉童

驚きも一等親でない見舞い

寒氣落ちつく 水仙の白

月の光に よめる白梅

あごに手が行く 格段の勝ち

師走の義理の 尻すばみ也

竹原市 小島蘭幸

灯り点けたまま眠ってしもた迷い

受話器ガチャリ反応のない淋しさに

喧嘩する情熱もなく恋終る

夫婦善哉笑うて見てもひとりかな

きっかけがなく賀状で詫びておく

高槻市 福田丁路

人脈も金脈も無く食いはぐれ

ワンマンの或る日或る時血の涙

値切られる事を見込んだ値と知らず

汐の香に阿呆のように立ちつくし

治に居て乱をとことん忘れ

岸和田市 高橋操子

反省をしながら入れる助け合い

姉妹うさぎと亀に似ておかし

別れ惜しんで自然に帰す鮭の稚児

大漁らしい旗帰り来る宿の窓

失敗もあるのでサーカス尚湧かせ

門真市 福島鉄児

遺句

譲られた席老人と見られしか

よいこともあるさとじつと耐えている

インフレをばやいてばかり策がなし

玄関の花も色褪せ妻の病む

病妻へ粥たく朝の台所

大阪市 正本水客

こんな時おとこは前へ一歩出る

落葉焚く煙りは白い笑い持つ

砂の沈黙を足音が消してゆく

断崖が続き海は不機嫌かくさない

水平線が燃えると夜がせり上る

倉敷市 本田恵二朗

胸の翳り見抜かれそうな水鏡

ささやかな夢あり齡ふと忘れ

榮華の虚像がくずれたみにくさよ

精薄の笑顔に釣られ笑み返えす

嗜みついてみたが寛容に齒がたたず

豊中市 戸田古方

ど忘れをいっしょに笑う友白髪

電気カミソリよりよう使わない三代目

おもしろそうに阿呆は風邪を引きません

これでもよその埃は気になって

字引片手にアイウエオからいいなおし

大阪市 本多柳志

銀行で老後の事も指図され

正月へ引き継ぐ握手して別れ

法話聞けばとても極楽へは行けず

盃を貯めて妓にあなどられ

柚子の里吟行

柚子風呂のかおりタオルにたたまこみ

神戸市 仲 どんたく

人形の足もがれても笑み続け

床を蹴る始動からぬ老朽車

辻久子リサイタル

秋沁みてストラバリウス泣くごとし

保険金生きて貰えた喜寿の幸
花捧ぐその時父も母も泣き

倉敷市 水粉千翁

花に聞く花の孤独を知っている

笑顔こそ土産手ぶらの子を迎え

雪を着てのぞく新芽の片えくぼ

きらいでも好きでもないときあきらめる

茶に坐る昨日と今日と明日に向き

今治市 原田一風

Gパンで出来ない尻を見抜かれる

包装を順々解くと妻が出た

現場とは施主の腹立つ仕事振り

忙しい忙しいと眼鏡を探し

妻の過去うっかり聞いて聞き流し

和歌山市 野村太茂津

冒険へ踏み出す一步に迷わない

鈍いから仲間にも光る底力

合の手のお世辞を憐れな嘘と聞き

鈴の音も木魚も楽し春の詩

雑音も大らかに聞くアドバイス

島根県 小砂白汀

金脈をたぐればドブに辿りつき

足して二で割ればどちらもコンマ以下

確率をあてにするほど落ちこめり

十指みな藍に吸わるる空無限

包装紙人のころをときめかす

竹原市 森井青居

奈良(二句)

句帖開かせて古塔に鳩が群れ
旅人のポーズにさせる奈良の秋

京都(二句)

詩情には遠く昼間の大文字

京の詩 いくさを知らぬ黒瓦

来てもろてよかった万年青のわかる人

名古屋市 吉田水車

鳥もかえり魚もかえる春とせん

なかなか幕の降らないわがドラマ

佃煮になっても鮎のはろにがさ

カラフルなら負けるものかと紅葉する

どうにでもなれと師走の庭を掃き

米子市 八木千代

送り仮名のように妻子もついて来る

非常ベル鳴らしてみたくなるしじま

雪国の女も冬へ眼をつむり

礎石ともなる愛憎を繰りたたむ

いたわりへ素直に眠る毛布です

八尾市 香川酔々

時雨降る人間縷々と生きる街

ポプラ並木の道で大志は抱くべし

雪国はただ雪が降る発車ベル

ときめきをかけては載せた雲流る
幸せがいっぱい老婆熟柿吸う

竹原市 山内静水

走ったら間に合いますよと灯を消され

けものめく中年おんなのひとり旅

しらふでも唄えるマイク要りません

どっちにもつけずつかれず男なり

十二月やつの思いで書くハガキ

大阪市 河野君子

緩取りがもつれ亡き友からみつく

師走風に足すくわれて市場籠

継ぎだらけの生活へ戻る割烹着

増築して

窓を拭く新春の光を溜めたくて

主婦の旗リズムに合わせて持ちかえる

島根県 堀江芳子

十二月の心を覗くか聴診器

病棟のぬるい味噌汁朝を座す

退院の語を冴えざえと置いて去に

菊活けて心の窓を高くする

子の情しみじみ言葉すくなくも

竹原市 三宅不朽

猫のまろさよ瘦躯の膝にきわまれり

流れ雲思慕も怨みもなく流れ

霧のなか人が人恋う霧の音

冬の石のそれよりしろき手術室
母の手垢よこの古手紙捨てきれず

八尾市 高橋 夕花

好きだよとひと言洩らし征ったまま

耐え忍ぶことのみ多き女川

良妻の名を頂いて飼育され

母の声深い眠りの底で聞く

スタートラインゆきつもどりつ除夜の鐘

柏原市 大峠 可動

別れがたくて水の流れについてゆく

闘病を偲ぶ月なり寒椿

足跡を描く譜が一枚ずつ続く

逃亡の資金に宝くじを買う

あたたかな灯り凡夫の眼を洗う

大阪市 本間 満津子

快い目覚めの朝へありがとう

時計だけ生きてる部屋に小さく座し

過ぎた日に花を飾って鏡をかけ

ぬすみ聞きそれは違うと云えもせず

塗りたてて見ても鏡の冷酷さ

前月分

島根県 錦 織文子

炎ゆるもの秘めて野菊にある孤独

石ころを蹴ればころころ石の詩

小ききみな素足へ覗く秋の音

丹精をあこれ活けて床の秋

妻伊川へ空を沈めて秋静か

大阪市 吉田 圭井堂

たしなめば新日本とうそぶかれ

私企業の辞書に補正の字句がない

不況など知らぬ公吏にのさばられ

禁酒二カ月

煙草ほどでなからは飲まぬ人のこと

さり気なく酒を止めたと云うものの

大阪市 大坂 形水

銀行がずらりと所得ベストテン

胃を切った話を聞いて胃がおかし

若い気でいても眼鏡が二つ要る

衿元の汚れわたしが笑われる

ネクタイの色も奥さん好みらし

大阪市 不二田 一三夫

創始者は詩人かビエロのメーカーアップ

狂人にもなれぬをペンに蔑げすまれ

美しい言葉忘れた口ひねる

寄席

奇形児が売れる高座をわびしとも

芸人の価値をテレビの出演数

和歌山市 小川 佐知子

ふりむいた窓病友の手が上がる

倅せは友に喜ぶ夫といて

豊かさを摘果などされ地に果てる

過去のこと忘れて姑の背を流す

高槻市 若柳潮花

蘭蝶が好きで古風な恋をする

陽溜りで夢を編み込む糸針

納棺のなかへ広げた舞い扇

南天の実だけが赤い法起寺

呉市 林野甦光

松活けて部屋が見劣りする平和

あけすけに言える白髪が増えている

先代の額は冷暖房がいや

騙された事は言うまい軽はずみ

大阪市 川口弘生

値上げた当座タクシーよく喋舌り

半分に聞いて御自慢に相槌し

うちのんや女は鍵をかけたがり

先輩が云うてたように目がかすむ

呉市 榎田英詩

夫婦円満セリフをとちることがなし

実らない汗を流して老社員

遠廻りそんな余情を持ちあわせ

マンションに住んで四角に動くのみ

和歌山市 津田与史

頼りにならぬ神を信じた馬鹿だった

起きるのはつらし起きねばならぬ朝

障子貼る今年も去年も同じこと

遺句集を読めば葵水が笑ってる

守口市 羽原静歩

日々楽し歩み続けて七曲り

かたずけて一期一会の旅をする

毒説を吐いて味方の虹となる

沈黙と多弁握手をして別れ

堺市 高橋千万子

くじ運が強いと出かけマッチなり

ふところと別に値上げが耳になれ

日々多忙祖母の背筋もしゃんとのび

一人一人ラッシュの渦に朝の顔

鳥取県 清水一保

精一杯今日も生き抜き聞く夜雨

政治家をけなして祖国に夢を持ち

独裁者でもあり太陽慈悲もあり

コーヒーでねばるファイトも見込まれる

大阪市 西出一栄

食卓の話題は物価を抜きにする

嫁・姑おせち料理も二本立

それぞれの抱負が異う難煮箸

才能を計るものさし孫に欲し

今治市 越智一水

平凡はいい盆栽おきを変え

習字でもしようかオールドミスとなり

無心とは子がつみ上げし砂の山

捨てるところ捨てて人間丸くなり

藤井寺市 西 いわを

昂奮を和らげ葛湯のんで寝る

人相が良くなる眼鏡の縁を替え

青空を悠々走る雲の足

首に皺みせても女ネックレス

大阪市 山 川 阿 茶

対決へせっばつまった顔でなし

歳末の苦勞はないがひとりぼち

一本の水仙活けるに勘を立て

デパートへただ行っただけ行っただけ

富田林市 板 尾 岳 人

太陽にどうしても勝てぬ峰の雪

厚くなる雪の重みに耐える峰

峰の雪借景に樹水胸を張り

どうしても二月の雪は喋べらない

岡山市 川 端 柳 子

日なたぼっこ日雇の老いにある和み

しあわせにならうよ札束さそいかけ

それでさえ元氣な間の但し書

愛つづり合わせて花の絵を画こう

松江市 岡 崎 祥 月

もう馴れた物価にやはり愚痴が出る

ポーナスも下馬評寒い風が吹く

浮彫のように夕陽は湖を抱く

くるまつなぐラッシュペタルを軽く踏む

松江市 恒 松 町 紅

味噌壺の置場を探す妻の留守

好きな酒と別居入院しています

信号機にまでも心を操られ

大ききでなくよく出来た魚拓賞め

松江市 柳 楽 鶴 丸

酒が毒ならので死にたいな

既成概念捨てて我が家の鍋料理

虚榮と意地が女の心に同居する

親と子の対話いろ紙折りながら

岡山県 直 原 七 面 山

眉間の傷はやくざの紋章

百一才の母の笑いの袖々し

血統書つきのコリーを派手に連れ

麻痺の子の耳へ祭りの笛太鼓

倉敷市 小 野 克 枝

良い方にとって嬉しい夢にする

不自由を知っている手が賛成し

妻の打つ二つ返事は怒ってる

一本の吊橋ゆすり合う夫婦

米子市 林 瑞 枝

娘の呉れた肌着が温い初蔵

迷う日の思案八十路の父へ問う

障子張り替え鏡台へ心澄む

後添いの話が亡義姉の側から出

東大阪市 竹中綾女

物価高つらいが御布施もあげたげる

あの時に見舞っておけばと計報聞く

彼の手を払って悔の夜となる

道具屋のほしがる物はひっこめる

東大阪市 竹中肖二

過信した金の力に見放され

定説を崩す古土器のひとつかけら

倅せは揃いの湯呑届く古稀

ときめきを抱いて茶房の隅で待つ

生駒市 草深酔升

内孫が二人主婦の座まだ守り

片言の孫と手まねで笑い合い

食べるだけですと倅せそんな顔

犬抱いて狂乱物価知らぬ顔

岡山県 永宗宗義

禁煙を破った音でせき上げる

吹雪する窓へ病院良いところ

しきたりを崩さぬ膳に肩がこり

死ぬ気にはなれず病人らしくする

諫早市 原田明春

日曜大工あとは肩揉め腰を踏め

平の目で見れば上役暇すぎる

インフレの正月庶民はちぢこまり

インフレへハンスに似た三カ日

鳥取県 鈴木村颯子

コンビニエーターやあい本日停電日

葬列の柩ゆっくり行きたかる

格子なき牢獄なりに改装し

表彰状金一封がかなめなり

大阪市 天正千梢

のがれるすべなく臆病者に歩を揃え

よか嫁っこ我家の自慢ひとつふえ

心のカード一枚ふやせる人に会い

形だけ求めたむなしさ笑うまい

竹原市 時広一路

足踏みの一歩がやっと前に出る

無理すれば切れそう細い細い紐

階段で立ちはだかつていたサタン

冷えた茶が辛抱強く待ってくれ

伊丹市 小川静観堂

倅せなどとう言わぬ老夫婦

杖ついて降りる老人バス無料

夢二に肩すべらしてもらったのはあなた

大花火ジョナサンのかくれた空を染め

三重県 川上大輪

葵水師一周忌

師を偲ぶ去年も同じ風が吹き

もの言えば金の話になるも暮

集金を待たせておいてよく稼ぎ
近所まで行つて戻つて来た賀状

岡山県 竹内翁童

いかめしい玄関セールスをよせつけず
雑草のたのしさ自然にさからわず
プラットホーム別離が永い汽車遅延
貧さを忘れ陽だまりの日曜日

玉野市 小谷仙山

盆栽の夢は大樹を捨て切れず
泣いて笑つて地球は止る事知らず
マッチ一本残して寒さに耐えている
天の一角に私の笑う場を見付け

島根県 榊原秀子

北風へ追わるる如く靴を履く
足音を追うて風鳴る十二月
広告の安値決意を鈍らせる
じみ過ぎる柄選る娘へ負けておく

岡山県 出原敬一

新幹線回復まつてる箸枕
年の瀬も救急車から今日が明け
錠剤の力を借りる年の暮
社会鍋人も冷たい風ばかり

愛媛県 村上旭童

耐える事ただそれだけの儲け口
胃が痛み肩がこるのもいて稼ぎ

コロコロと笑うて初老を悲しませ
も五勺とは情ない夜の酒

和歌山市 田中万作

仮縫のままでお嫁に來た私
停年後まだ持駒の歩を握り
投げ出した持ち駒汗に濡れている
成金の歩はいつの間の夢に生き

尼崎市 黒川紫香

六十の夢平凡になりすぎる
灯が見えて唄が出て来る川の道
ともしびも修験の声でゆれにゆれ
水客ご令息結婚

安全運転へ人生二人のレール敷く

大阪市 中川滋雀

洛西水尾の里(二句)

柚子村の道繁々と陽も匂い
柚子風呂の肌話題がとけてゆき
ゆく年へ誤植もあつた真綴る
ボーナスの軽さが重い十二月

倉敷市 藤井春日

波と貝なにかロマンスありそうで
娘十八まだ磨かれてない寶石だ
妻と云う杖あり嶮しい坂も越え
教科書通り歩んで世間に見放され

西宮市 島居百酒

革新に肩入れしとるコップ酒

団栗の序列の中の自尊心

ご利益を信じる母の看とりうけ

老いらくと自嘲しながら虹を追ひ

神戸市 小浜牧人

作戦のゆとりを蓄めて二位につき

結論をやっと見付けた夜が明ける

木枯らしの人恋うて吹く笛の音か

緞帳が静かに揚がる除夜の鐘

大阪市 阪上十止庵

忘れたい軍歌をいつか昼の酒

急行通過別れてからの寒さかな

三通話やっとなにに触れてくる

ふるさとないから御堂筋歩く

大阪市 江城修史

満ち足りた饒舌不況をさかなとし

心急く師走へ男の頬がこけ

華やいで胸のしこりが消えるなら

果しなきレールへ老いの夢を乗せ

富田林市 和田維久子

関電病院眼科の友を見舞う (二句)

黒白の視野へ明日の虹賭ける

わがままの云える夫に支えられ

初孫も並らぶ今年の年賀状

菊作りうるおい少し見せて姑

新宮市 大矢十郎

商魂はさしきわりなく時価と書き

のどもとを過ぎれば悪酔するローン

焼香は上手に十年議員さん

落第を中退にする印刷屋

岸和田市 植山武助

善良な市民になれと納税書

冬眠の構えか祖母の着ぶくれて

ポーナス日だから飲む人

峠から見れば万更でない在所

宇部市 平田実男

松茸は喰ぐ食品と言う我が家

結納もローンが効いたらなと思ひ

札束をタクトの先につけて振り

音痴だと思つていないから唄え

高槻市 山田季賛

退院へ妻の小言が多過ぎる

弱つて足へ力を入れて見る

母ちゃんのスタミナ食で病み上り

硝子拭く今日のんびりの病み上り

小松市 馬場魚山

臨時ニュース維新前夜の京に似る

年代で唄が違つたりクエスト

人混みで買う楽しみを女持ち

幼樹でも四季を知つての葉をもち

大阪市 河井庸佑

ひとことが惜しい人物去らさせる

情熱を入れてる割に伸びなやみ

出来ぬ子の小さな努力に眼をかける

勉強はしてやっけると子の意見

大阪市 室谷徹舟

我一家支えた制服有難う

縁なくて聖徳太子落付かず

磨き過ぎでんなーと歯医者者のぞき込み

その手付き歯医者者の機嫌よく分り

貝塚市 行天千代

孫の血がここにも落ちてる事故現場

女には惜しい度胸の母でした

亡母の味私が造り娘に教え

年賀状の手本は亡父の書いたもの

西宮市 藤村メ女

干蒲団よくふくらんで母たのし

夢みんな消えて寂しく鏡閉じる

貧衰し心に叛いた嘘一つ

糸通す女の目にも年が見え

倉敷市 稲田豊作

庭石がある日忍の文字に見え

物価狂騰貨してる金が軽くなり

国民を納得させる嘘を練り

数だけの土産を買いに母の旅

大阪市 児島与呂志

バスが揺れうとうと女の喋り聞く

おぼはんが又鉄砲玉に成る師走

堂々と抵抗仕合える夫婦仲

善人の愚痴口数が急に減り

守口市 野呂右近

十二月老化を自覚して寒し

見送りもなく団地から出る檻

ペンキ塗るように心の傷かくす

胸に棲む人無く明るい綿帽子

奈良市 宮口笛生

酒のんですむ哀しみならのみ給え

ラーメンの熱さがうまい夜食とる

コーヒーを入れて徹夜に朝がくる

まず亡母へ供える仏壇あるくらし

島根県 大森孝華

地に還る木の葉おくって冬の彩

稚児どんの衣裳ぬらされ通り雨

お念珠へ溶けて心の灯を求む

湯豆腐の肌が恋しい旅帰り

羽曳野市 塩満敏

自動化に明治の母もなれてくる

勝ち馬の新聞こっそり買うてみる

定員はどこ吹く風の駅ラッシュ

ポーナスの配分ママまで要求書

島根県 錦織文子

ちぎれ雲過去を忘れたように浮き

傷心へ北風強く押して来る

姑となるときめき独り酔うている

妻伊川へ空を沈めて秋静か

大阪府 宮尾あいき

指定席金の力を見せつける

抱きしめてくれた安堵で予は眠り

雪割って咲いたを見せぬいじらしさ

部屋暖し夫の墓地の風を聞く

笠岡市 出原真奇

十二月お目出度うさんと書く賀状

娘の車助手席に居て肩がこり

臥牛山自然動物園にて

孫ときて日本猿に見られて来

日々好日孫居りお茶あり酒もあり

兵庫県 遠山可住

払出し票一字一字をうたがわれ

新しい石碑一つに今朝の寒

聞き馴れた声がラジオでかしまり

やりくりを見せぬネオンが派手に点き

松江市 小林孤呂二

心の座標XにもYにも傾けず

脱線へわれ不甲斐なき明くる朝

いつからか公僕の殻を抜け出てた

松江市 吉岡通児

上るのは風にまかせてなどと愚痴

人生険し時に背伸びをするも術

コップ酒大臣以上のことを云い

姫路市 梅谿庵不醉

七十回廻ったことになる地球

過去忘れ仲よう暮して古稀迎え

泣いたとて戻りませんと泣いている

倉敷市 小幡里風

草笛で越す故郷の七曲り

夢に似た話へレモンティーが冷え

振り向けば先様も振り向くお振袖

大阪市 今西章雅

自画像へ鏡が僕を固くさせ

菊の香が汚染空気を漉してくれ

故あって別れた人と再会し

大田市 藤田軒太楼

やれ謝恩やれ蔵ざらいとせきたてる

新任の弁は社運をみな背負い

知らぬが仏それで結構もてている

氷見市 関美子

ターミナル地球の寝返りふと思ひ

大臣の孤独は鯉にひとりごと

恋めくら砂上の楼閣とも知らず

出雲市 原 独 仙

無職われ今日は何日何曜日

迎春は卯年六回おらが齡

姪の結婚

人生の航路をしかと握れ舵

神戸市 中村 ゆきをを

なにもかも話してみたい人に逢い

救いようない底辺の話聞く

まるめ込む握手は派手に派手に寄り

岡山県 池田 古心

反撓は先に言われてあまのじゃく

年金にたどりついたら慾が増し

香たてて見ても名士にもなれず

香川県 岡田 拳法

先祖いてお前がいると孫へ説き

大相撲稽古嫌いがまた負けた

衣食たりゴミと騒音だらけなり

樺原市 岩井 本蔭棒

おしめ替え乳をのませた子に殺られ

送別の胴上げさすが鬼も泣き

立ち読みを覗けば僕と同じ趣味

大阪市 神谷 凡九郎

ポケットに入れてるだから手が休む

船は出ていった一つの恋が消えたけど
人間を見つめる僕も人間のくせに

和泉市 西岡 洛醉

几帳面だけが取得の父に似て

来る年の命と枯花種落し

天職と決めた実直平のまま

兵庫県 河原 みのる

死ぬことを忘れて生きる有難き

四十キロ渋しぶ開いた自動ドア

井戸水も田水も金が要り文化

平田市 久家代 仕男

資金ぐりつかず労資が手を握り

町工場週休三日で年を越し

北風を背に寄り添うてバスを待つ

東大阪市 本多 清人

セールスに心の動揺見抜かれる

日本の平和へ野鳩の群多し

打明けた秘密へ彼の頼もしさ

青森県 木村 涼人

農具にもお鏡供え核家族

天二物与えず空気うまいけど

軍靴ズックピニール昭和も半世紀

京都市 松川 杜的

秒針の影花時計四季の色を持つ

旅好きが師走の穴場云うて来る

還暦へ赤い兎の版画買う

京都市 都倉求芽

油また差されて歯車廻らされ

七色のうちの五色は消えた虹

虫喰うたあとを人間様が食べ

東大阪市 落合思月

思惑を秘めてさりげなく通い

仮面ぬぎすててくつろぐ我が家の灯

末の娘も嫁がせふぬけのような母

松原市 玉置重人

しるこ屋で男小さい箸を取る

大声を補聴器そっとたしなめる

嵯峨野路や人の多さがもの淋し

大阪市 西川誓二

働いた銭ではインフレを追い越せず

衣食足らねど赤い血に人間味

餌ばかりとられ女狐は穴の中

大阪市 黒田真砂

雑踏が心の故郷かも知れず

切札があつて女の高笑い

心の霧沈めて歩む女坂

鳥取県 森田布堂

蟹の色ほめて四桁の値を憎み

追い越しを待つ鈍行であくびする

自首をするつもりだったと捕えられ

大洲市 堀内暁風

おみやげの栗で栗飯喰べさせ

自慢した子に背かれてゐる孤独

役得もないに世話好き生れつき

八尾市 大路美幸

父入院一句

頑固さの戻った父見て出る病院

泣く顔を見せじと少女走り去る

罪すべて洗えと如く冬の星

東大阪市 斎藤三十四

アルバイトこんなに昼飯うまいとは

一日に何度か孫のことにふれ

黒幕が居た一人でない芝居

八尾市 古川鶴声

千金の夢へ亡者が並ぶくじ

集いからはなれ淋しく金を溜め

寿の袋を冠った宿の箸

岸和田市 葛城伊三郎

気が利いたつもりが少し抜けていた

教えては呉れぬ手つきを見て覚え
背を向けて達摩片眼のままで泣き

大阪市

藤田頂留子

原稿と違った挨拶拍子わく
退屈の無いくらしで長生きし
兎でも飛び出て来そうな雪景色

大阪市

津守柳信

又お釣りさてはボーナス出ましたな
福引券抽選場迄の夢

家計簿の自衛バーゲンをハシゴして

茨木市

吉川米子

繁華街親子であるく軽い足
忘年会去年の事をむし返し
信用にあぐらかいて来た老舗

和歌山市

沢山福水

はめ言葉いいようもまた年の功
目的と同情は別ときれい顔

予約札貼って客の氣引く目算

神戸市

佐々木静泉

いつからか猫背になった職に生き
七十一の香車の道に悔もなし
鳶が鷹生む咎はなし親の馬鹿

和歌山市

内芝としよ

水栽培根までもまともな陽を受ける
紅葉狩り下戸と一緒に気疲れ

極限へ噴水背伸びしていどみ

大阪市

柳原静香

流されて種は中洲でよく育ち
姑の肩をもみつつ聞く家風
口笛へ合唱して居る明るい窓

和歌山市

若宮武雄

燃ゆるものなく夫婦のお茶が冷え
もみじ葉に老醜の手の恥かしや

転勤の話寂しく孫を抱き

米子市

増田竹馬

埋れ火は灰の深さに耐えられる
寒風が届けてくれた子の便り
見おろしへ思いがけない風当り

和歌山市

吉野富江

適当に健忘症で恙がなし
忘却と云う人生のかくれ蓑

金策に成功ネオンの灯がきれい

仙台市

川村映輝

冥途まで苦勞を背負う母心
足袋継いで継いで物価高云わす
自重したつものの酒が又乱れ

加賀市 細呂木魯木

吾が心山水明鏡へ近よれず

無神經で暮せぬ年がまた明ける

倉吉市 渡辺 菩句

矢作橋過ぎ太閤を話題にし

ふるさとの寒さのがれるごとく旅

堺市 伏見 茂美

今さらと思う心が会わさない

走ろうか戻るか寡婦の五十坂

宿毛市 山本 窓花

針金へ素直な小枝曲りゆく

片言で歩き出したら兄となる

東大阪市 桑原 喜風

永病みの妻にも四季の知恵をかる

満願の心も弾む谷吸寺

大阪市 神田 秀峰

雑談はお得意挨拶はせぬお人

産ぶ声を挙げて人生永い距離

大阪市 鈴木 生仏

我年を忘れて孫の年数ぞえ

大寒をしのげば桜の春も来る

菊沢 小松園

ほん寺と背中合せのサウナ風呂

撥られそうなところへ女佇ち

唇を塗りなおしての間待たしとき

泣いて居る女を残し皆んな発ち

父の無い子の鉛筆が尖つてた

若本 多久志

亡母祥月命日(一句)

亡母の夢見ぬこと久し老いて我

京端の宿杉箸の香がうれし

ご免やっすと境内を通り抜け

金策無用まろやかに年の暮

ジェット機のように一年暮れてゆく

北川 春巢

麻酔さめかけて夢にも色があり

世話してたバラに退院迎えられ

手の甲の皺 今朝もまだとれてない

駅までできょうも帰った足馴らし

人ごみへしきりに出たい病み上り

川村 好郎

働かせてもらっていると思う日も

試練の年素っ飛ぶ独楽と廻る独楽

淡々と老妻と焼く雑煮餅

衆目を知りつつ女さりげなく

スイッチよりヒューズが飛んでいる会社

何事もなかった顔で二階下り
蟹怒るステップをふむ脚をたて

西尾 栞

中のれん優雅な趣味の人と知る
新築の二階海いっぱい窓を開け
舞台廻って酒場はカチューシャの唄

作

謙譲のひと水仙の下を向き
恍惚のひと佇みし吹き溜り
ちり鍋の硝子の外は雪明り
満開というのを知らぬ福寿草
三歳にして媚を売る性をもち

今治市 月原 宵明

叩かれる杭男なら恥とせず

東京都 池口 吞歩

近

柿ほめりやあれは家のじゃないという
叱るまいしかし気になる子らの嘘
つめかけてよさが薄れる三千院
凡人の幸せ今日の箸を置く
ふり向けば貧しさだけがある記憶

大洲市 米沢 曉明
岐阜市 市川 鱗魚

俺はまだ生きてる昭和五十年
ただ食って寝るだけ昭和五十年
生き恥を曝して昭和五十年
ままならぬ憂き世や昭和五十年
幾許の余命ぞ昭和五十年
去年きつかった足袋だがやせたかな
なる程と思う予言におどされる
古寺に違和感自動販売機
運悪い空気太鼓にしめこまれ
裏を見てまた表見て墓をなで

今治市 長野 文庫

社告

第3の雑詠

「愛染帖」

四月号から本誌を飾る

2月15日締切（三句以内）

送り先 〒560 豊中市中桜塚三丁目13-15

橋高 薫風 宛



明治37年3月25日、路郎先生
17歳の時の写真・このころか
ら川柳をはじめた。

麻生路郎物語

(2)

—十七歳の出会い—

東野大八

の一つでもあつた。

江戸期における上方商人勃興のころ、大阪商人が如何に骨身を削って身代蓄積に精励したか、チリも積れば山となる式の細々とした

幕しに徹しつつ、いかに商機を捉えることに異常な努力を傾けたか、儲けがケチの懐じいばかりの「のれん」を背にするその土根性ぶりについては、井原西鶴の町人文学の、町人

もの三部作（日本永代蔵、世間胸算用、西鶴算用）に詳しい。船場とは、正しくそうした大阪商人が土根性のメッカそのものといつてもよい。

麻生善七が四十も半ばといういい齢で、選りに選って大阪といっても並外れたこんな船場へ、はるばる尾道くんだから出てきて、どういふ伝手でここに住みつき、一家を呼び

よせる暮らし向きになったものか。詳細は不明である。山雨楼メモにつぎのくだりがある。

「尾道は花井卓蔵、山口玄道さんらを生んだところ。衆議院議員橋本左吉氏は亡き父の基友達であつた。玄道さんも父の知人であつた」

この記述からすれば、善七の大阪での就職は、メモに出てくる尾道の知名士の関連する会社か、それともその伝手による縁故就職のようにも思われる。

「会社員であつた父は、明治四十二年九月二十日私が二十二歳のとき、脳溢血で五十五年の生涯を終つた。私には厳格な方だつたが遊びは相当にやっていた。この父の挿話は、

尾道から単身上阪して、船場に働き口をみつけた麻生善七は、二年間の大阪の暮しにも自信がついたとみえ、郷里から家族を大阪へ呼び寄せた。里子の路郎もこうなつてはいつまでも駄々をこねているわけにはいかず、島での里子の生活も十一歳の齢を迎えて終止符を打つた。そして船場尋常小学校四年に編入された。時に明治三十一年春である。

さて、麻生一家が根を下ろした大阪の船場だが、こゝは商都大阪のどまん中、世にいう浪速商人の大小問屋の密集地帯で、老舗の名門ものれんを競うところだ。かつてテレビの評判ドラマの「せんば」は、この船場という特異な土地柄を舞台としたもので、いわば大阪商人の土根性ぶりのモーレッツぶりが見せ場

他の機会に譲ります」(山雨樓メモ)

路郎の父はサラリーマンであったことだけはこれでわかる。だが一体どのような勤め先の会社なのか、一切ふれられてはいない。他日機会をみて語るといふ亡き父に関しての話も同様で、山雨樓メモにはこのあと一行の記述もない。

明治三十七年、十七歳になった路郎は、この春、出入橋にあった高等商業予科(商大の前身)に入学する。この学生生活の中で、路郎は運命的ともいいう、川柳との出会いがはじまったのである。

「高商予科に入学したとき、クラスで新聞や雑誌をとった。その中に読売新聞があった、その紙上に柳壇(名称「瘤柳」)があった。田能村朴念仁、後に朴山人がその選をしていられた。そこにある句を読み、非常に興味を覚えてつい作句はじめたのが、そもそもの川柳を作り出すようになった動機である。そのころ、窪田而笑子(のちの当柳壇の選者となる)も投句家の一人だった。

自分の句が新聞に載ったのはこの読売柳壇がはじめてである。そのときの句はどんなものができ上っていたのかは、切抜きや控えがないのでわからない。そのときの柳号は路郎

ではのっていない。千松だった。路郎という号を使用するようになったのは明治四十三年頃と思う」(大正八年発行の柳誌「検日傘」五目号所載のアンケート)

この辺で路郎が宿命的ともいえる川柳との出会いをみせた、往時の新聞柳壇について述べておこう。路郎のころの底から川柳なるものを触発させた重要な役割を果たした新聞柳壇でもあるからだ。

川柳が新聞に柳壇の形をとって掲載されるようになったのは、明治二十七年の日清戦争によって発表したのがそもそものはじまりとされている。それ以前は、明治十年代に出た滑稽雑誌の柳欄が先行した形であった。川柳欄の雑誌の第一号は団々珍聞(まるまるちんぶん)である。創刊は西南の役が起きた明治十年の三月、東京神田雉子町団々社の発行である。念のため申し添えておくが、日本の新聞のハシリは文久二年に出た通称バタビヤ新聞がそれである。シナ式の和綴本で美濃紙二つ折。いわば江戸化政期の瓦版の特集号の体裁とみてよい。発行も明治の初年は三日に一回が圧倒的に多い。当時の新聞名は「中外新

聞」「崎陽雜報」が一流どころで木版活字使用、あとの新聞の題号は「此花新聞」「海陸新聞」などはややまとまな方で「浮世風聞」「もしお草」「そよ吹く風」といった人を小馬鹿にしたようなものが氾濫している。明治五年に「東京日日」「報知」の二大新聞が出現して、はじめて今日の活字マスコミが軌道に乗った形だ。

読売新聞の名が出たのでついでにこの新聞の題字の由来を書いておこう。創刊は明治六年十二月、日就社といって英和字典の発行元だったが、副業に当世流行の新聞事業に眼をつけた。諸般の準備整ったがかんじんの紙名が決まらず社員間で大いにモメた。まず俗談平話を旨とする故「通俗新聞」とでて、いやふりがな付だから「ふりがな新聞」「かな新聞」「やわらぎ新聞」「をみな新聞」などとてんやわんや。思いあまって漢学者に相談したら「京華流影」と命名してくれた。こんどは英文学者にきくと「東西南北」まるで麻雀屋である。新聞紙は全国 of 早便なれば「あきつすのはゆまぶみ」(秋津州の駅)という舌を噛みそうな題名にどうやら落ちつきかけたところ、その席上で瓦版というのに気付いたのがいて「よみうり」と出た。今日の天下の

「読売新聞」の発刊時における以上が真正正銘の実話である。(昭和十年刊『日本労働秘史』一元社版)

閑話休題、団々珍聞もまた往時の日刊新聞変じて雑誌形態となったしろものの一つであった。川柳はその第二十六号から姿を現わした。その歴史的第一句は

一朝敵も昨日は東、今日は西

この雑誌は十六年間も持ちこたえたが、感心なことに毎号川柳数句は欠かさなかったものの、遺憾ながら徹底した狂句であった。この雑誌の川柳に眼をつけたのか、団々珍聞から少しおくれて、明治十年八月発刊した「驥尾団子」も川柳を掲載し続けた。

一穴なくば何んのおのれが二等親

これが創刊第一号の句

これにつづいて翌、明治十一年十一月に創刊された「月とスッポンチ」も川柳を忘れなかった。創刊号のサンプルの一句

一風呂の尻で究理をしたか水雷火

以上の三誌の川柳の点者は、風也坊雪舎―すなはちのちの七世川柳である。正しくいえば七世風也坊川柳 山県氏広島久七 初号雪舎。明治十六年社中推選により七世を継ぎ、同十九年隠退柳翁と改め、同二十四年九月六

十七歳で死去。

まだある。あけて明治十二年一月「我楽多珍報」が創刊された。発行元は京都日日新聞社。ささの三社はなべて江戸は東京なのに対し、関西から似たようなのが出たわけだが、点者にこと欠き、そのためかわざと川柳を意地悪くひねってその柳欄のタイトルは「洗流」―こりや猫だ鯨かしくの針で釣れ

創刊号のへき頭の第一句がこれである。

川柳とは名のみ、骨の髄まで悪フザケの狂句に爛れ切った活字マスコミの横行ぶりに、やがてマナジリ決して登場してくるのが井上鯉花坊と阪井久良岐の兩人である。

本山桂川編の「川柳久良岐全集」に拠るとそもそも久良岐が川柳との馴れ染めは

「平田篤胤の講本によって、川柳の興味あることを知り、明治十六年ごろ団々珍聞の狂句に応募した」

とある。久良岐は明治二年生れだから十四歳で川柳に手を初めたことになる。時の点者は前述の通り七世風也坊川柳である。久良岐の川柳入門はこうみると狂句というわけだ。

この久良岐が鯉花坊とともに「狂句百年の負債を返す」べく狂句追放運動に起ち上るの

だが、久良岐が新川柳運動への活眼を開いたのは、正岡子規の感化によることは今井卯木著の「川柳江戸砂子」の序文の中にあきらからだ。子規と久良岐は共立英語学校の同期生であったが、在学中は没交渉のままであった。ところが世に出て子規の俳論にふれたのが久良岐二十七歳(明治二十八年)の時であった。久良岐の新川柳確立のための柳論「川柳梗概」を生む素地はここに生れた。

もっともこの久良岐にしても鯉花坊にしても、湧拜として高まる往時の俳句、短歌のめざましい革新運動に刺激されてのことだが、鯉花坊は狂句を純正川柳の場に戻し、川柳詩をそこに加味する近代的川柳の確立を図るべくまず王道川柳を唱えた。これに対し久良岐は、初代川柳の柳魂に還るべしと主張したのである。ともに狂句追放への意図に他ならぬが、この両者のライバル意識がやがて、明治三十三年代における新聞柳壇時代となって花開くのである。

鯉花坊の日本新聞における「新題柳樽」は明治三十六年七月三日の創設となり、一方久良岐は電報新聞に「新柳樽」の柳壇を開始したのが明治三十七年四月二十九日付からである。このほか岡田三面子が東京日日に市村駄

六がやまと新聞に、田能村朴念仁（のち朴山人）が読売にと時を同じくしてそれぞれの柳壇をもって活躍した。

「岐氏は江戸趣味を唱導し、古川柳の穿ち軽味、可笑味の三要素を明治の新時代にきわめんとし、剣氏は一般文学に欠けたる滑稽が川柳の主要なる素と主張す。かかる時しも朴念仁氏は読売紙上に俳句趣味より出でたる写生を生命とする一風を唱え、ために三氏てい立の状を呈するに至った」（中島繁雄郎・「矢車」明治四十四年二月号）

往時の新聞柳壇はこのようにして久良岐派、柳樽寺派（剣花坊）読売派（田能村朴念仁）の三流てい立を主軸としていた。明治三十八年八月紙上のこれらの柳壇選者の作風はつぎの通りである。

―殿様頬かぶり奥様編笠海水浴 剣花坊
―貴与金書入れにして質を置き 久良岐
―萩の怪またほんぼりが一つ見え 朴念仁
―御長命会申し候間魔判 駄六

明治三十年代の世相は、政治、軍事、思想、社会各方面にわたり騒然たる事件が相ついでいる。憲政・政友両党の結成。日露戦争の勃発。足尾鉍毒事件で軍隊出動。ロシア第一

革命起る。片山潜・幸徳秋水社会民主体結成。ポーツマス講和を不満として東京全警察焼打ち事件。孫文東京で中国革命同盟結成。平民社解散。南満洲鉄道株式会社設立ETC。

一方、詩壇では藤村が「若菜集」を発表したのにつづき、雑誌「明星」（M33）が創刊され、星とすみれの新抒情時代の幕は切って落された。若き天下の俊秀、与謝野鉄幹の新詩社にむらがるなかで、きらめくその星座に―しお輝く明星こそ鳳晶子（与謝野晶子）である。それに相拮抗するように、石川啄木が二十歳にして「あこがれ」（M38）を公刊して世を愕らせた。新浪漫派のけんらんたる銀河を想わせるこの新短歌時代に対して、俳壇では巨匠正岡子規が死去（M35）したが、それと同時に虚子・碧梧桐の二大勢力が俳壇を左右した。明治三十六、七年に「温泉百句」を通し両者の一大論争が展開されたあと、碧は世にいう全国行脚三千里の旅のわらじをはくのである。

時に明治三十九年。

読売柳壇にはじめて川柳を見出し、その魅惑にかりたてられた路郎十七歳の多感な青春を押しつつ文明

治三十年代―それは路郎の十代のすべてでもあった。

つりがねマントに朴樹の下駄を鳴らしたその十七歳の学生路郎の上に、日露戦争の妖雲がおしひろがった。その硝煙の彼方からきこえるのは、人間愛の叫びを三十一文字の短詩型のロマンにこめた与謝野晶子の「君死に給うことなかれ」の絶唱であった。

（路郎先生に関する知られざるエピソードなどお持ちの方は、川柳塔社編集部不二田一三夫宛にお知らせください）

夢が広がるショッピング
近鉄がお届けします



アベノ近鉄 TEL 621-1231



上本町近鉄 TEL 779-1231



奈良近鉄 TEL 33-1111

アベノ
上本町
奈良



近鉄

俳風柳多留廿五篇研究

一(五)一



一 敬 木 八

西原 亮・入江 勇・紀内 恒久
鈴木 黄・清 博 美・青木 迷朗
室山 三 柳・八木 敬一・岡田 甫

73 四月上旬に小判をみそでくひ

西原―初鰹の高値を述べた句である。『蜘蛛の糸巻』に「天明・寛政の頃は初鰹といへば甚価尊く、日本橋へ初船の着し日は年によりて、鰹一本価金三両をもて換へし」とあり、正に「小判」を食っているようなものである。「みそ」で食うことについては、『守貞漫稿』に「鯛・ひらめには辛味噌、或はわさび醤油を用ひ、まぐろ・鰹等には大根卸しの醤油を好とす」というが、どうであろうか。川柳にしても洒落本にしても辛味噌で食うのがほとんどである。

要するに「江戸にて初ものの尤賞せらるるは鰹」というように、目に青葉の候に高値の初鰹を辛味噌で食うという江戸っ子の意気を示す句である。そこが江戸小判を辛子みそでくひ

春の末銭へ辛子をつけて喰ひ
青木―賛。生姜醤油も鰹に合います。御賞味の程。
一七・八1
一三・12

八木―賛。「あいさびへまつかにすぐがきつ
いみそ」(二五三)の「みそ」自慢、の意を
「みそでくひ」はかけていると思う。
紀内―八木氏考えすぎであろう。

岡田―やはり八木氏という通り、自慢(み
そ)の意が含まれているよう。

74 黒猫と小判をむす子詠めてる

西原―労働の息子が、力なくぼんやりと猫と小判をながめているという意である。当時、労働者に黒猫をあてがっておくと全快するという俗信があった。

「猫に小判」という俚諺があるので、それをきかせ、小判があっても遊ぶことのできな

いあわれさをも詠み込んでいる。
室山―賛。金持の息子の労働。こちとらは健康だが貧乏(遊ぶ金に窮している)、といった気持がウラにある。

八木―賛。猫に小判。
そこが江戸猫に小判を蒔ちらし

紀内―賛。
黒猫を物ぐさ太郎抱て居る
一五〇・11
傍二・31

岡田―同。

75 ついちまで筋めたつとき大地也

西原―「築地まで筋めつき大地也」とよむのであろう。築地は塀の一種。「筋目」とは条理のことで、それが尊いとはきちんとして整理されている様をいうのであろう。要するに江戸っ子の江戸自慢で、特に千代田城の讚美であらう。

室山—この句は、珍しく京都をたたえて詠んだ句と考へる。

入江—室山氏説贊。

清—同。本句は京を詠んだもの。

紀内—小生、そもそも読み方すら不明でした。多謝。

青木—不明。室山氏説謝。しいて云えば上野寛永寺か。当時は三条橋の高山彦九郎の例があるごとく、皇居尊崇の念は乏しかったのではなからうか。まして江戸に於ておやである。

岡田—小生は「築地まで筋目正しき」で直感的に京都と思ひました。第一に、最初から京都とする目的で街路を作った京都は、碁盤目のように町筋が真っ直ぐで曲折がほとんどない。公卿屋敷、寺の多い当時の京都には築地が多かった。そして「大地」……。やはり京都を詠んだ句と思う。皇室礼讃、京都礼讃句は珍しいが、おそらくこの句の作者は京都見物にいったことのある人にちがいない。

76 お妾の十九家老八国をたち

西原—この家老は国家老で、江戸の殿の御愛妾の振舞いについて諫言をなすべく出府したというのである。女の十九才は厄年である。

怖かりし十九の年も無事で過 武三・11

愛妾の厄年で国家老が出府するに及ばない。殿が異常に心配して常ならざる態度を示した故か。又は、十九を(毒)の洒落としたものか。

古来、愛妾と十九才のかかわりがあるかと

楊貴妃・静・姐已・玉藻の年令に當つたが無関係である。仙台高尾が身請けされたのが十九才の時。勿論、仙台高尾は身請けはされたが「お妾」になっていない。しかし片倉小十郎からすれば、妾にかかわる事件である。少々無理もあるが、礎稿としては、仙台高尾の関係句とする。

室山—妾に哀れをとどめし八十九歳

傍四・8

やはり一般句であろう。十九歳の女の厄年、お妾退治に国家老の出府は川柳界の詠材不文律である。

清—室山氏説に賛。江戸での殿の行状が国元になつて、家老がしぶい顔をして江戸に向つたのであろう。

八木—高尾は少々無理な感じ。

紀内—うるさい国家老が江戸へ出てくるとは、お妾にとって最大の厄である。

奥さまの十九めかけのひがとまり 五・29

(これは奥様にとって大厄)

岡田—紀内氏のいう通り、国家老の出府—愛妾解雇—妾にとっては厄年。こう解さねば

「お妾の十九」が生きて来ない。

77 はい軍の蜚罵の上を飛び

西原—「嬉遊笑覧」に「蜚合戦ハ(狂歌咄)」

に、卯月の末つきた、宇治こハ蜚の集りにならぬ興を催せり。余所の蜚よりハ一き八大にして光りことさらにみゆ。世にいふ頼政入道が亡魂にて、今も軍する有さまとて夜に入ぬれば、数十万のはたる川面にむらがり、或

は鞠の大き或ハそれよりも猶大に丸かりて空にまひあがりとはかり有て、水のうへにはたと落ては、はらはらとけて流れ行くこと幾むらとも限りなし云々」とある。

敗軍の將源三位頼政が宇治の蜚の芝で果てたように、蜚合戦で敗れた蜚が宇治の蜚の芝の上を飛び交つてゐるという景である。

二五・11

蜚飛ぶ下に哀れな扇なり

室山—賛。宇治平等院の扇の芝は、『平家物語』『源平盛衰記』などに見えず、後人の創作らしい。謡曲「頼政」で有名になり、現在も寺内にある。

岡田—同。

78 西行も野良の時ハ北をむき

西原—西行はもと北面の武士であった。坊主頭になる以前、すなわち野郎頭の時北面の武士であったとの意。

勿論、「西」と「北」のしやれや、若い時は北(吉原)通いをよくしたであろうとの意もかけてある。初代川柳の没後すぐなのに大分狂句臭がみなぎつた句作である。

のりきよと云えばあらくれ武士のよう

室山—賛。野良—野郎。「北」の両解が焦点。

入江—賛。

西行も野郎あたまで一首よみ 一二・14

北向きの武士やめて西へ行き 五五・6

清—同。狂句臭。

岡田—同。

路郎賞
川柳塔賞

候補作品中間発表

自 四九年九月号
至 四九年十二月号

路郎賞候補作品 (到着順)

若本多久志

所詮もう銭にならない老の汗
割り切れぬ心古しと思えども
三日目の雨は雀も悲しげに
カンナの朱一期一会の彩で炎え
眉描いて女哀しい性をもつ
黄金色の秋を信じて離農せず
青空を醜い人の世は忘れ
ふるさは風もなみだを拭いてくれ

男ならかく消えゆかん陽が沈む
つまずいて起きてわが道らしくなり
本間満津子
阪上十止庵

水粉 千翁
板尾 岳人
島居 百酒

☆

正本水客

生きてゆく蟻に日向も蔭もなし
小浜 牧人

鈍感な夫で或る日救われる
春の海のたりのたりと汚染され
もういいかいまだだよくされ縁
秋になれば砂浜なんでもないところ
野坂つき子
中川 晃男
遠山可住

喋りたくなればとぼとぼ峰歩く
花芯をのぞいて花を哀しませ
太陽をとらえて光る水しびき
足組んだ爪先きでものを考える
アメリカの自信大統領を斬りすてる
森井 青居
板尾 岳人
岩田 美代
越智 一水
都倉 求芽

ワッショイワッショイ米価ガス代交通費
何を護るつもりで女しやがむのか
仲どんたく
小砂 白汀
菊沢小松園

☆

西尾 栞

生きてゆく蟻に日向も蔭もなし
作家の妻いつも背中へ話しかけ
小浜 牧人

花芯をのぞいて花を哀しませ
不二田一三夫
岩田 美代

造反の蜂円型の巣を作る
香山 酔々

美しい夢でありたい距離に居る
この僕を善人と見た耳打ちか
受付けの親切窓からのり出して
太陽に恥じぬころの窓を開け
コンピュータ汗の過程は見てくれず
錦織 文子
岩井本蔭樺
原 独仙
嘉数千代香

つまずいて起きてわが道らしくなり
小島 蘭幸

何事も順番があり串だんど
夫と掌を重ねて生命確かめる
残照の命集める彼岸花
水粉 千翁
高橋千万里
堀江 芳子
竹内 翁童

☆

川村好郎

美しい蝶にも過去のある身なり
新聞の休み腹立つ活字見ず
二世も添うつもりを妻に断られ
炎より水のもだえに心ゆれ
魂を濯いだ涙ぬぐうまい
高橋千万里
大坂 形水
川口 弘生
高橋 夕花
鈴木村諷子

銀婚も近く呼吸もタテとシテ
生きてゆく蟻に日向も蔭もなし
平凡な日々ありがたいとも空しとも
山根 白星
小浜 牧人

鈍刀に見られてもよし鞘払う
包まれて包む心を忘れまじ
泣くかわり笑えば笑うこと多し
本間満津子
野村太茂津
和田維久子
堀江 正朗

☆

北川 春 巢

被害者のどんな示談か家も建て
ベレー帽俳句も二三年かじり
梅雨晴れの犬も洗濯物のうち
冷そうめん供える膳に箸も置き
仮面錆びついて個性となる怖さ
夕陽がきれい陸橋を渡ることにする
河村 日満
渡辺 曉童
瀬田 美知
天正 千梢
嘉数千代香

さからわぬ女房に当てる鞭がない
去る者を追うのも悲しい小企業
動いてはせぬかと蠶おちつけず
背を向けて子なき夫婦の夜が長い
松川 杜的
傍島静馬
落合 思月
金井 文秋
宮西弥生

☆

菊沢 小 松 園

作家の妻いつも背中へ話しかけ

こんな時の私が嫌いで顔洗う
新聞の休み腹立つ活字見ず
不二田一三夫
岩田 美代
大坂 形水

問われたら答える齡を女持つ
喋りたくなればとぼとぼ峰歩く
故郷の山彦だんだん小さくなり
ダンブからわざわざ降りて怒らはり
ライバルにされているとは気づかない
拍手するところがわからぬクラシック
燃えてても女ですもの踏みきれず
川口 弘生
板尾 岳人
柳葉 鶴丸
小島 蘭幸
野坂つき子
仲どんたく
伏見茂美

川柳塔賞候補作品

戸 田 古 方

小細工のすぎた植木の枝が折れ
朝の靴働く方へ向けてある
競い咲く花へ鉄を入れしるる
工場の橋に暮しの詩がある
旅なれて地蔵の顔もみな違う
風吹けば風に揺いて根をはる木
腹が立ち拾った石は丸かつた
末法の世の新聞をたたみけり
動けない水は波紋を望んでる
椎の実はずのままに落ちていた
長尾 保
大林曲ん手
内芝としよ
武内 雅堂
柚木 踏草
谷川 渥子
谷口あきら
安藤寿美子
若宮 武雄
槻谷 一葉

☆

大 坂 形 水

抜け殻になりそう末っ子に嫁かれ
妻という母という枷抜きたい日
労わりの一言わたしを走らせる
待たされて死亡欄まで目を通し
改札機の方がお愛想舌を出し
末法の世の新聞をたたみけり
朝の靴働く方へ向けてある
白杖の先で大地に話しかけ
鴉の目柘榴割れる日知っている
はにかみは真珠の艶のしたたりか
小谷清女
宮尾みのり
谷岡 芳枝
櫻谷 漫柳
藤原世史春
安藤寿美子
大林曲ん手
岸本豊平次
梅本登美也
白岩文衛

☆

橋 高 薰 風

朝の靴働く方へ向けてある
末法の世の新聞をたたみけり
一匹の蚊が今日の僕を責めている
クツシャミを仕損なったり蠅が来て
また米ぬは賛成票の数へ入れ
暮 思いつめ思いつめ
朗々と詩吟聞える貰い風呂
しゃべり続けて誘惑の手をのがれ
缶ビール車窓に映る僕がいる
香水のシミが残ったような恋
大林曲ん手
安藤寿美子
秋田 茂
藤原世史春
白岩 文衛
谷岡 芳枝
吉田 落猿
槻谷 一葉
古谷 恭一
伊藤 一郎

☆

次回中間発表は5月号と9月号の予定で
編集部



川村好郎選

大阪府 稲本 凡子

島根県 岡芳枝

仮面脱いで閉らんの灯を閉む
一瞬の宴枯葉は乱舞する
残り火は小出しするかの様に炎え
肩の荷は下りたが寂しさつきまとい
腹いせに閉めた襖で指をつめ

大和高田市 岸 本 豊平次

タクシーで来て賽銭は十円か
木とすれば傷ものなのに床柱
中座する言い訳先に持ってかれ
郷関を出て住み込みのパチンコ屋
戦地として見た香港に客となり

柏原市 小 谷 葉 子

過去秘めて花の命を語り合い
洗い髪いつか別れた人思ふ
落葉して土の悲鳴が聞こえるか
悩み持つ女に故郷の子守唄
春愁や私を無口にしてしまふ

木枯に磨かれ梅の香めでられる
逆境が育てた子等の太い足
骨皮となつて柿の木冬に耐え
おしまれて散る山茶花に香をたく

岡山県 岡山 長 尾 保

忍ばせてくれたお金があたたかい
坂道でつなぐ夫婦の掌の温み
下を見て生きるくらしが苦にならず
春を待つ息吹き何故か冷たすぎ

和歌山市 吉 野 久 子

憤りかくす笑顔がゆがんでる
我が心易者に聞いているおろか
せめて娘に倅せほしいと祈る寡婦
お叱りを受けたか部下を叱ってる

寝屋川市 柴 田 恵美子

倒産して社長のラッパ調べられ
息災のカボチャも喰べて十二月

帰省バスに乗れて今年を締めくくり
平凡に福寿草の鉢買うてくる

和歌山市 樫

村 ふみよ

町の灯が恋しい宿の一人旅
亡き母の顔が重なる叔母とねる
結ばれぬ恋の演歌がよろこばれ
腹立てた事が恥かし秋の空

島根県 松

本文子

酒に助け借り明日からの貌つくる
菊活けて腹立てまいと誓う日よ
屋上の風に聞かせるひとりごと
定まらぬ胸に時計の音確か

西宮市 朝

山 千世子

冬至南瓜嫁と無言の日が昏れる
夕陽墜つ風の便りに友の計を

寂光院にて

落葉舞う甘酒茶屋に時雨よけ
新年を迎う希望を芸に賭け

弘前市 小山内

貞 男

清濁の濁を好むは策謀家

それぞれの夢がふくらむ四季の花

そこ迄は考えなんだ保証印

名古屋市中

大林 曲ん手

落葉にも温みがあった吹き溜り
白紙には戻らぬ愛をいとおしむ

凡人にさせる安定剤の妻

尼崎市 中谷利美

恰好のお値段ですと見くびられ
大それたことを葉書で出す度胸
口説かれていられるにおんな笑い出し

伊丹市 樫 谷 漫 柳

背のびして暮らした名残りの門構え
少年をだしに新聞休刊し
論争のあと湯豆腐のやわらかき

姫路市 大原葉香

白髪染め男の見栄の浅はかな
秋を纏て帰れば村も秋だった

二人だけの茶の間テレビ聞き流し
大阪市新川貞祐

もつれ合い頼りにしあいする同居
文春に抜かれ新聞枝葉追う

目減りしたからの数字を温める

今治市 園部正則

銀杏の葉拾わんとすれば地の匂い
テレビ見て時間待ちする除夜の鐘
順調のように見えても影はでき

大阪市 浜西駒子

インフレに妻もパートにかり出され
バランスの取れぬ体にした貴男
流行を追えば月賦がついて来る

八戸市 安田勝己

ダブルパンチ男の意地で立っている

棺掩うて黙六一つ置いて行き

初詣皆生きて行く音を立て

出雲市 藤井晴月

名月を仰いで帰る貰い風呂

姿見へ写して夢を奏でてる

寺の鐘平和のひびきを確かめる

豊中市 安藤寿美子

これしきの工事に唸る電気鋸

風を待つ枯葉のしぐれ浴びたくて

幕合いもなしに五十の幕があく

東大阪市 崎山美子

鈴虫の喜怒哀楽をのんだ砂

凡婦よしマンネリでも良い子等がいる

まとまった頃にヘソクリあてにされ

鳥取県 林露杖

旅の夜ふと辻占を買ってみる

南無帰依法五戒に遠き身の因果

鐘撞いて仏の声を聞く構え

兵庫県 高橋近江

風まかせ靡けど竹の地下組織

なによりも笑顔がほしい嫁探し

丸出しの女の自負は愛も消え

尼崎市 大垣たもつ

去く雲の流れに思う四十九日

片親の肩にくいこむ子の重み

倒産で真直ぐ自衛隊に入り

岸和田市 池田露子

愛猫の塚に落葉のかけぶとん

せせらぎを楽譜にのせて山の宿

熊と衣裳撮らせて何か買えという

富田林市 奥井春子

遣されし時計の響き夜寒し

あどけなき捨子の写真社会面

無理をして夜寝るだけの家而建て

吹田市 藤原世史春

「儲かりまっか」「もうかりまっか」が消えた街

インフレという片仮名がつきまとい

親馬鹿は怒鳴りつけとき泣いている

岡山県 白岩文衛

言う僕が解ってないのにうなずかれ

十二月踏切なかなか上がらない

今治市 渡辺伊津志

夕焼けの秘密を見せた雲が舞い

茶絶ちしたことは言わない里の母

大阪市 堀口欣一

パートレディなどとキャバレー宣伝部

鈍行はたのし日が落ち月が出る

備前市 武内雅堂

青畳敷けば茶の間がひきしまる
祈るほど母の面影美しく

和歌山市 秋月 宏方

古希若し市川女史に励まされ
塗り替える地図はもうない年となり

島根県 岩田 三和

十二月もう一息の荷をかつぎ
大衆の良心をうつ百八つ

河内長野市 井上 喜醉

またきつと会える涙はすぐ乾き
台風より恐い親父の低気圧

島根県 槻谷 一葉

老婆逝く庭にサルビヤ炎えつづけ
沈黙が爆発前の秒きざむ

七尾市 松高 秀峰

どうにでも廻る古だよ選挙戦
学校の寄附の振替送って来

大阪市 横地 正彰

会うてまたすぐ会う欲の女に会い
つながれた犬は退屈そうに吠え

西宮市 山田 喜代子

家計簿に赤信号の出っぱなし
かみ合わぬ議論の末に笑い合い

大洲市 宮尾 みのり

満ち足りていても過ぎにし人を抱く

振り切ったつもりが夢の中に出る

青森県 波 ただお

病院へ通いつづけて十二月
花束に心の花も添えてやり

新井市 栗和田 清子

不況時にボーナス払える有難さ
姑となり一入はげむ親孝行

松江市 本庄 快哉

ただ耐えるだけで不況に策がなし
妻ある日刑事のような感のよさ

鳥取県 伊藤 静枝

ふるさとの暮しを変えたダム深し
針供養とうふの肌をいとおしむ

堺市 堀畑 日々子

亡き夫の愛車運転したい日
母と二人何かたりないお正月

島根県 堀江 蓮露

夢に見る亡妻娘より若し
痴話喧嘩さえもうらやむ独り者

新潟県 市川 一峯

過疎捨てて出れば公害待って居た
二人のため世界はあるのと親を捨て

今治市 大本 パット

折り込みの印刷代を値踏みする
日本に核を持たせぬ平和賞

折角の新米粥のように焚け
愚痴聞いて貰うて余計惨めなり
今治市 真山 彦

店じまいセルその手に乗るものか
着こなしの良さが化繊の値にしない
今治市 今井 松花

経験を話して帰る見舞客
お布施にも便上値上げナムアミダ
堺市 栗本 藤持

乾杯のジョッキ妻の方が空け
倅せな月日流るる如く消え
大阪市 神夏 磯道子

父逝きしときの決心に支えられ
不況風など当らない公務員
八戸市 島田 昭治

無理をして孫に見せたい白を据え
いたわりを込めてゆっくり愚痴を聞く
鳥取市 勝山 紫宏

嘘つけぬように写真年齢を撮り
ヘソ繰りができぬ妻持つ安堵感
羽咋市 三宅 ろ亭

どうなるのどうにかなるさそうだわね
聞き耳を立ててる耳にささやかれ
鳥取市 岸本 無人

泉佐野市 大工 静子

ただ今へ祖母の返事気に入らず
雪国の山里飾るしだけ柿

寝屋川市 江口 度

不景気な顔には不景気な顔で会い
さあ俺の季節だ松のひとり言
宝塚市 吉田 とんぼ

財布の紐締めて夫を奉り
ごもつとも言えない性で煙がられ
新見市 吉田 落猿

不景気の風耐えきれず戸を締める
臍くりはないかと妻に問う師走
岡山県 船越 洋之

卓袱台に大きな夢を掲げてる
朝靴を磨く絆で妻の愚痴
高槻市 山田 スミ子

叱る身になれと結局は叱り
一円の有りがたさスパーで教えられ
松江市 岡崎 雪美

筆不精ついつい電話で長話
山茶花の赤冬空に挑戦す
高槻市 竹内 花代子

伊勢志摩の旅

日本の心で渡る五十鈴川
五十鈴川鯉の背を打つ秋の雨

高知市 竹崎 寛

人様の長所みつけていやになる
善人とよばれ気になる沈んだ瞳

大阪市 那須鎮彦

ストーブの温もり不況の余波を受け

大阪市 大國たかし

北風に押されてくぐる縄暖簾

新潟県 高野不二

我が影と妻の影とも見る我が子

鳥取県 福田陽山

久しぶりゆっくり寝られる降雪日

愛媛県 小山悠泉

満足な妥協へ今日の酒うまし

大阪市 平井露芳

下取品中古で売られ生きのびる

福原市 西本保夫

不況と言うのに平社員忙しい

鳥取市 大塚豊生

スラスラといく結末に異が待ち

鳥取県 加藤茶人

飲めぬではすまぬでたい席につき

倉吉市 果風庵

ふるさとはいつの間にやら無人駅

米子市 江原良二

この不況来年の古たよりにし

今治市 伊藤一郎

女生徒の不満先生の不公平

今治市 古野伶人

神様の呉れた休暇と恢復期

寝屋川市 富隆子

ぬけぬけと一心同体などとうそ

松江市 梅本登美也

円満の秘訣のように鍋煮える

島根県 飯塚虎秋

償いを重ねて和む年の暮れ

千葉県 鳥飼義久

握られた拳に我慢してもらい

大阪市 須浦つね

老人会パフで顔直す人もあり

大阪市 村島秀村

老人会明治娘に春が来た

大阪市 花田繁子

大臣でなく共今の世落ちつけず

名古屋市 吉田文枝

坊さんやはり人の子パチンコもし

岡山市 西田溥子

金脈の崩れへ作家慎太郎

百人一首と川柳 (8)

富士野鞍馬

いたとみえ、それを詠んだ川柳も多い。

百人首落馬した出家をも入れ

雨譚 (萬二五)

花ものをいはねど落馬人がしり

カタル (二三二七)

馬士の口からばつとちる女郎花

寿山 (二四三三)

花より外に知る人もなし落馬

長蝶 (三三三〇)

馬方の一大事也女郎花

(武十一一)

馬から落ちて腰折れの名の高さ

玉章 (二二三九)

御落馬はいかがさてていいお歌

雨夕 (三九二)

腰うち歌をよませたは女郎花

春駒 (八八三〇)

腰折を詠んで落馬はつつがなし

雨夕 (三三二七)

かたるなと詠まねば知れぬ落ちた沙汰

玉守 (二二一一)

遍昭は腰うち歌もよんだ人

菅裏 (五二二一)

遍昭は腰折歌も詠んだ人

鯉 (一六五三)

男郎花だと遍昭は落ちぬとこ

里島 (二二八四)

遍昭にあやまつている借馬引

木質 (一〇八八)

落馬にもこりず乙女をとめたがり

春駒 (六四一一)

とどめたは乙女落たは女郎花

二三 僧正遍昭

天つ風雲のかよひ路吹きとぢよ

をとめの姿しはしとどめむ (古今集)

この歌は、出家前良岑宗貞といつた時、五節の舞姫を見て詠んだ作である。

乙女の一首僧正にならぬうち

太丸 (二六二〇)

と川柳はそれを詠んでいる。また次のように揶揄している。

遍昭は乙女に何の用がある

柳島 (五五五三)

乙女とどめて遍昭は何の用

魚交 (八三三)

遍昭はもう一ふくと空へいひ

(拾五〇)

僧正は歌で黒髪なでるなり

木馬 (八一二一)

遍昭は女未練らしい歌

題九 (二四〇二)

遍昭の歌でもう一首有名ながある。これも「古今集」にのせられてある歌で、

名にめでて折れるばかりぞ女郎花

われ落ちにきと人に語るな

というのである。これは男女相愛の關係は秘密がよい。というのである。それも川柳は、

恋歌の手柄僧正はうたぐられ

撰州 (傍二五)

口どめをきれいにされる女郎花

(二三二五)

女郎花御座きといふ一首也

(拾四二二)

下手話し我落ちにきとかたる也

里勇 (六一一七)

我おちにきと人にかたるな手酌

帆布 (二〇八三八)

等と詠んでいる。ところが、この歌の「われ落ちにき」を、遍昭が落馬したと誤解されて

落ちて名高き冠と女郎花

巨眼（二四〇五）

落冠も落馬も百の中へ入り

香口（二四三二五）

一落冠は紀貫之（三五）

竹子（二四四二四）

遍昭は、俗名を良岑宗貞といい、桓武天皇の皇子大納言安世の子で、素性法師（二二）の父である。左近衛少将、藏人頭になったが、寵をうけていた仁明帝が、嘉祥三年（八五〇）崩御になったので、哀慕のあまり出家したのである。山科に元慶寺を創設し、仁和の頃（八八五）僧正になった。光孝天皇も深く帰依されたようである。六歌仙、三十六歌仙にも入っている。寛平二年（八九〇）七十五才で入寂した。

一三 陽成院

筑波嶺のみねより落つるみなの川

窓ぞつもりて淵となりぬる（後撰集）

陽成院は、陽成天皇が上皇となられたものの称である。清和天皇の皇子で、母君は、前に在原業平が背負って逃げた、藤原長良の娘高子である。元慶元年（八七七）十才で即位せられ、高子の兄の基経が摂政となったが、事情あって、同八年に光孝天皇に位を譲り、太上天皇（上皇）となられ、天曆三年（九四九）八十二才で崩じられた。

川柳は右の歌の文句を取って

孝ぞつもりて扶持となる有がたき

春駒（五九一七）

横へ眼のひよつと流れてみな川

（武十八八）

などと詠んでいる。

一四 河原左大臣

みちのくのしのぶもぢずりたれ故に

乱れそめにしわれならなくに（古今集）

河原左大臣は、源融のことである。嵯峨天皇の皇子であったが、仁明帝に養われ「源」の姓をたまわった。左大臣となり、寛平七年（八九五）七十四才でなくなった。

東六条に河原院という豪華な邸宅を営んでいた。「河原左大臣」と呼ばれたのである。その邸宅の庭に、奥州塩釜に擬した塩釜の設備をして、毎日大阪から、海水を二十石運んで、塩を製造したということである。尤もそれは商売ではないから、

六条でわりにはあわぬ塩をやき

（安七松二）

融公割に合わない塩を焼き

（安六義一）

六条の塩は損だと徳大寺

（拾五三）

手作だと塩を諸卿へ分けてやり

（二七三）

塩売のけんびきになる左大臣

焼いたのは大臣汲んだは中納言

秋風（宮初三六）

などと川柳に詠まれ、中納言は在原行平のことである。

その邸宅の跡が、今の枳殻邸で、近くが珠

数尾町だから、

塩釜のけぶりもたへて珠数や町

（拾五三）

塩釜のあと百八軒ほど建ち

振州（傍三二）

塩釜の旧跡じゆず屋だらけ也

（一四二六）

とも詠まれている。

また歌の文句を取って、

陸奥のしのぶだだアの仇を討ち

千之（二四〇一）

と宮城野しのぶの仇討をい、

誰ゆへにみだれ染にし御はふらつ

陸川（三五二）

しのぶずり召し傾城にみだれそめ

門柳（二六三）

しのぶずり紅葉の形は付ぬ也

平洗（三四三）

しのお摺よりも高尾は島をすき

雨夕（三四二〇）

と、伊達綱宗の高尾へ通ったことをいっている。

勘略は融の大臣きらひ也

（一四八）

と融公の名に洒落た川柳もある。

「出不精も遺伝するのか親と子の」

私にとって近いような、遠いような春果さん、一九一三年のお生れとのこと、私は一九〇五年ですから八歳の年上。旧制大阪高等学校では少し私の方が先輩。しかし、春果さんの柳歴は四十年、私は三十七年、大高時代から川柳にいられたことはきいていましたので、間違いない川柳では先輩です。私、初心の頃、路郎先生の「新川柳評釈」でうまいなと感心し、お手本にしていた

「ゲブルの一番前に立つ若さ」
の句主そのお人なのです。

句会毎に何くれと教えられてきましたが、この頃は大会などお目にかかる外余りお逢いしていません。つい先年、私の勤めている大谷学園のすぐ近くの丸山通りに住んでいられた際も、お訪ねもせず、お逢いもしなかったのです。私の物臭か、春果さんの出不精か。冒頭の句で、春果さんが親なのか、子なのか、そんな話も聞き漏したままです。

兎角、この『聴診器』を読んで、春果さんという方の全貌が伺え出しました。ぼんやり思っていたことがはっきりしましたのです。

春果さんは、今日までずっと勤務医でいられた方です。私はインクの香も新しい句集を手にながら、書きつけたコトバは

エールリッヒ（誠実な）エルンスト（真面目な）ルーイッヒ（不動な）ゲナウ（正確

評

北川春果著

川柳隨筆
句集

『聴診器』

書

戸田古方

な、几帳面な）

一番春果さんらしい句、巻頭、近影の下の
院長に業務外業務などはなし
自序に出ている次の句もまた、春果さんの
自嘲であり、自讃でもありましよう。
「われながら完全癖に腹が立ち」
春果さんは素直に左の各句で、自らを批判
していられます。

「雑草でよし朝々の通勤車」
「足跡のない毎日が早う過ぎ」
「水道の漏りもよう直さぬ亭主」
「読まんならん本ばかりへ桜咲く」
「消夏体制わが家はすだれ吊っただけ」
「英語の質問ないかないかと父はひま」
春果さんはご家庭でどんなにいいパパである
ことか。

「影までが歩調とって入試パス」

ゲナウな春果さんは先輩、上司の送迎や御自身の結婚歴をベーパー婚に始り前書をつけて怠ることなく作句していられます。それは随筆の随所にも見られます。随筆集の始め、「旅人としての路郎先生」の中で、先生の旅についても、第二句碑から第四句碑に至る記述もそうです。「とりとめもなく」と自ら書いていられますが、その謙遜とは正反対に実にきっちりしたものです。

「ユーモア特集」以下「川柳における大阪弁」に至る六篇は、例年新年号の川柳塔誌上を飾った「ユーモア特集」を担当された時のものと記憶していますが、科学者春果さんのユーモアの分析は実に微に入り細を穿った、克明な、科学的なものです。しかし、科学でも割切れない川柳の正体への深い憧れを持ち続けられるのも感ぜられます。
「われながら完全癖に腹が立ち」

の句が一層生きて感じられるのも、私だけではありません。

昭和五十年、今年の一月号に私は「ユーモア特集」の執筆を編集部から委嘱されました。春果さんのこの長い労作を読み返えして全く冷汗ものです。

春果さんが飽くまで正攻法をとっていられたらというのに、私は全く裏街道から虚をつくといったような行き方——私の周囲の一切は全て喜劇、人生を見詰めれば全く笑いの種——といった行き方、春果さんとは正反對な難解な私を丸出しにしているのです。

春果さんは「『句の生命』について」の中で、路郎先生の「生命ある句を創れ」を春果さんらしく説いていられます。私は、先生の「人間陶冶」にフットライトを当てているのかもしれない。

ユーモア特集のあと、新関西新聞に載せられた「風流茶ばなし」が数篇出ています。お

医者さんの内輪話で、巧まない川柳味。軽いものながら、流石鍛え抜かれた筋金入りの小話は読みかえし、読みかえし、尽きないものを感じます。

再び「患者」に始まり「ベニシリン」「ストレプトマイシン」が出てきます。その名を知り、恩恵をも蒙りながら、そのものについての知識をもたない私たちはいろいろ教えていただけたかもしれませんが、それも面白半分な、無責任なものでなく、それでいて、社会批判と唸らせる所に春果色が出ています。

「性は善小さい嘘へちと吃り」

「患者」の中の「写真病患者」へ偽りのカルテを書かねばならぬくだり、この頁の余白へ私はこの句を書きつけました。

面白いと思ったのは「勤務医と走り医」です。職場では句を作らないといわれる春果さん。それこそ、名医春果さんは生きもの、人間を相手にいつも全力投球されているからです。職場の句は殆んどお友達のお医者さんの

句を借りて来ていられます。

この「勤務医と走り医」では

「勤務医も診断書はしい暑さなり」

「患者」の中に「診断書病患者」というのがあります。「是非とも休みたい。病気になるれば診断書が貰えるのだが……」と病気の願望？自然と痛んだり、熱が出たり、診断書をもろうとケロリ。

この句、ご自身の暑中見舞の句を発端に、お友達のお医者さんたちのお返句を待っていてます。返句の大部分は初心も初心、生れ始めての作句も披露され、春果さんの後進御指導ぶりを見るようです。A B C : G の先生方でその後、川柳にとりつかれた方がきつとあると、ひとりで頬笑んだものでした。

隨筆の最後は「戦後二十八年」ですが、今年（昭和五十年）各地、各所で、この半世紀を回顧する催しや金銭があることと思われまます。春果さんのこの止の企ては実に時を得たものといえるでしょう。春果さんらしく、具体的統計の数字を上げていられます。ただの回顧趣味でなく、句がちらされてあり、それらは何年か、何十年後に難句になってしまいうようなものです。人間の歴史を伝えています。春果さんはやわ肌の熱き心を忘れない科学者なのです。春果さんは路郎門の珠玉、この一冊はすばらしい春果さんのマイレシシユタイン（一里塚）といえます。

・ 近 作 ・

酒

屠蘇酌んで我も遊ばん華胥の国
酒顛童子老いておしきせ二合半
朝酒が寝酒となつて八十路過ぎ

麻生 葭 乃

・同人吟・

秀句鑑賞

——前月号から——

若本多久志

ちっぽけな善意でもよし心満つ

高橋操子

ひとの善意に対して、交流する何物も持たない人間が、余りにも多い今の世に、こうした句が尊く光るようである。

小指ない男へさりげない視線

島居百酒

特種な社会に生きる、こうした人々の絶えないのは悲しいことだが、現実の病巣として見過す外はない。その意味で「さりげない」という言葉がよく利いている。

倅せを流すに惜しいしまい風呂

高橋夕花

誰かの言葉に「倅せとは、平凡な生活の中のひと時にある」とあったが、終日の家事を終えて、何わだかまりなく、のびのびとしまい風呂に浸る主婦の気持が、巧みに詠み込まれている。

いま生きているありがたさ陽が沈む

堀江芳子

作者が、退院間近な頃の句であろうが「朝の来ない夜は無い」と言った吉川英治氏の言葉を想起して、作者の苦しい人生行路に平穩を祈念したい。

寒行の角を曲った音となり

森田カズエ

木枯ふく街頭では、いちずな信仰に燃えて真摯な寒行をつづけている人もある。その鉦（太鼓）の音が、次第に遠ざかってゆくにつれて、何か自分の心に空洞のようなものを覚える寂しさ。そうした余韻を頂いた。

思い切り泣けとばかりに陽が沈み

両川洋々

我々の遠い先祖が、この地球上に住みついた頃から、太陽は人間の神であった。陽が昇る時、沈む時、それぞれの思いを込めて祈り、さまざまな悟りを与えられた。この句はそうした一瞬を詠んでいるようである。

秋深く徒食淋しい蜩掬枝

西出一栄

老境のひと時、ふと襲ってくる哀愁というようなものを、晩秋に結びつけた共感の句として頂いた。

ここまでの道を蛇口の水に訊く

河原みのる

「幾山河越え来し水の甘さ哉」と詠んだ、誰かの句を思い出させた。ロマンの香りを感じる佳句と言えよう。

確かめる愛へ男の慌てよう

故福島鉄児

ドキッとさせるような句で、責任不感症な世の男性に贈られたものらしい、故人の遺作として光っている。

亡父亡母の光もまじる星

神原秀子

澄みきった秋の夜空に、降るような星の数々、ああ、あの輝きの中には、亡き父の、亡き母の光も。と思慕の念が、こみあげてくるようである。

陽のぬくみ両手に受けて秋惜む

堀江正朗

誰かの句に「たなごころ合せて秋の陽を浴びぬ」というのがあって感銘を深くしたが、この句も、ひと時の倅せを大切にする詩人の心が、ゆかしくも又、尊く感じられる。

帯しめて炎えるものあり

秋ひそか

女は、いくつになっても、ほのかな夢を抱いて生きてゆくものであり、それが又、今の世を生き抜く糧ともなるのではなからうか。

旅衣二期一会の膳の色

沢山福水

詩人は同じ旅行をしても、あらゆる事物に、普通人と違った感覚をもち、旅の粗膳の一皿一鉢にも悟りを感じるものである。

前号訂正—P38の「朝のビル掃除器のように人を吸い」は、飛田好一さんの句です。

（谷のぶを）

・水煙抄・

秀句鑑賞

—前月号から—

菊沢小松園

受験前灯りが消えている不安

小谷清女

恐らく大学入試をひかえた学生の様子を案じている家庭の勞りと不安な状態、腫れ物に触るような受験生のぐるりの氣遣いが浮き彫りされて痛々しい。本人の不透明な心理描写もある程度灯の消えている部屋で現わされて、言い古された素材であっても観点と技巧で一句に生かされることを示して、よい示唆になる。

張り終えた障子の白さ心満つ

小谷清女

古いよい時代から伝承された日本女性の内蔵している女らしさの一面が無理のないかたちで現わされている。平凡の中の美しき、これこそ本当のものでなからうかと思う、古いが素直な句。

幸福駅の切符が噓えそうにない

定金冬二

幸福駅の切符を鼻で噓っていた人々も考えで見ると自分の身内にもそれに似たもの、便乗しそうな反面を感じて待てよといったところのうのか。或いは表面今日の顔をしている人達でも尚且文化に反して弥次馬になる可能性を認められると言うのだろうか。優れた時事批判が光る。

裏切りの朝もきっちり歯をみがく

定金冬二

この作者の持つ意外性、予想外の観点から素材を持って来て然もその事証の壺を外さぬ妙手にはいつも立場が変わっている私達も感心している巧みなという他ない。日常茶飯事でありふれた歯を磨くということが大それた裏切りは何の不自然さもなく繋りを持っていく。この意外性がこの句の生命と言いたい、併しこの人の境地は独自のものであって誰も真似の出来るものでないし、真似の出来ることでないとおもう。

捨てられた日から人形自由です

小谷葉子

普通拾われた幸をおもうのにこの句のように捨てられたことを謳歌するところに川柳する人の目があるのだろうか。困われ養われ餌に苦勞のない筈の籠の鳥に幸せを感ずるのは人間のエゴであり自己満足でしかない。人形に慣れ切れない生活は開放された時から本当のものになる。しかしそれが幸せに連がるとは又問題外である。自由と幸とは別個のものと何の連絡も持っていないからだ。
柿落ちる天寿を全うして落ちる

江口 度

柿も余りになり過ぎて人を備って取らせると反って近年は損な時もあり、家人が取れる範圍を取って後は鳥の餌、満足な形で熟柿になつて木から落ちて本来の目的に叶うものはない。天寿を全された人達にこんな連想をするのは非礼だが今の時代寿命が延びて八十九十が普通になれば大変だ、目出度いことに違ひなくとも空恐しくなる一面色々のことが案じられてくる問題は将来のことでも心配するのにより過ぎることはない。誰かが言っていたように自由に楽に近ける時代が来るかも知れない。生きる自由があれば又死ぬ自由もある筈だと言うことだ。考えさせられる真剣な問題に将来必ずなることだろう。川柳もやはり哲学に通ず。

別々の色をさがしている夫婦

宮尾みのり

夫婦も個々の寄り合い如何に似た者といえ趣味も違えば性格も違う同じ方に氣持が進入しているとと思えない、むしろ夫婦なるが故に反って少しの違いも見過しならぬ時もあるかも知れない。小さな夫婦間のギャップをこの句は穏やかに捕えている。見過し安いが味のある軽いタツチの水彩画か！

★

▼暖い南紀へ／いらっしやい／「川柳わかやま」と「川柳しんぐう」合同句会。

二月八日二時（一泊）湯の峰温泉。会費六千五百円（宴会共）但し旅費は含まず。兼題は煙・宿・越える・騒ぐ。ゲスト若本多久志氏

蝙蝠か野仏か

直原七面山

各柳社の最優秀句、又はそれに準ずる句が数多く載せられているのですが、私はそれらの句を読んでゆく中に、次のような疑問を抱きました。

それは、これらの作品が、果たして「川柳人」と称せられている「同一種族」の人々の手によって創り出されたものなのであろうかどうかということでございます。

そこで、都合上似たもの同士を集めて取りあえず二つのグループを作ってみました。

第一群

蝙蝠が一匹しむ男の秋

ガスライター炎の中でおとな達

折鶴となりひとづまに逢うている

弱肉のおぼえ魚の目まばたかぬ

燃え出さぬ世論へ明日の鳥がはい

第二群



野仏に祈る名もない人ばかり
貧しくも酒は綺麗な金で飲み
今夜発つ母は明日の米も暮さ
過疎守る瞳へ今日の空の蒼
国富んで山河つかれた貌となる

さて、これらの作品はいずれも、数ある他の作品に比べて、溢れんばかりの柳味を持ち、格調品格の点でも非常に高く、リズム感の面においても誠に秀れてい、そして余韻も十分に持ちどの面から見ても非の打ちどころが無く、しかもどの句よりもより強く人々の心を捕らえ、人々の共感をかち取るに違い無いという確信のもとに推賞せられ、あわよくば、将来日本川柳史が編まれる時には、その書の中にその美しい姿をとどめ、永久に光り輝くであろうと思っても居られることと思うのであります。果してこれらの句の全てにそのような価値があるのでしょうか。

私はそこに大きな疑問を持たざるを得ないのです。特に人々の共感を得るといふその一点において。

私はこれらの作品の中で、川柳人は勿論のこと、一般大衆にも名句として認められ、そ

して親しまれ、愛吟され愛唱されながら、末長くその命を長らえて行くであろう句を、第二群の句の中に見出すことが出来るのです。第一群の中にそれを見出すことの出来ないことを誠に残念に思います。

従って、これを言葉を変えて言ってみますと、第一群に属する句を創られた人々は無論のこと、これを優秀句、佳句として選び出された人々も共に、みんな川柳人ではなくして、全くの別世界に住んでいる方々だということです。

ご本人自身が如何に「俺は川柳人だ」という強弁されようとも、それはその人達の思い上りであり独りよがりであって、私達とは別世界の人々だと思えます。

敢て申し上げれば、これらの方々は、人々の共感を得ると言う川柳の初歩的段階において大きな誤りを犯かしているからなのです。さて、皆さん、私が前述の如くこう断定し断言することは、果して川柳人としての道に外れ、川柳人を冒瀆する行為となるのでしょうか、実はそういった点については是非とも皆さんの忌憚の無いご意見を賜りたくて、ここに敢てペンを取った次第でございます。

川柳忍法

中川晃男

川柳作句において、その表現法は勿論、対象のとらえ方でも多種多様である。

具体的なもの、抽象的な現象——、それら

を表現する主観と客観……という点は、囑目を主とする俳句、作者の眼で見心で感じたことをうたう短歌においても殆んど同様であるが、川柳は更に突き進んで実に変幻極まりない。

作者の心の叫びは変わらないとしても、形式季題にかかわらず要なく、老若男女果ては動・植・鉱物・自然現象ETC、あらゆるものの中へ自由にもぐり込んで川柳にする。否、自身がそのものに変身して数々の一七字を生み出す。その立場になれば多分こう言うであろうと推量し、或いはその姿を借りて自己を主張する。そこに川柳の醍醐味があるのだと云っても過言ではないであろう。まことに川柳でなくては訴えられない忍法の如きその妙味は尽きせぬものがある。

なればこそ古川柳—近世川柳 現代川柳へと人間の怨念？が綿々と脈を打って来ているのではなからうか。一旦これに取りつかれると仲々抜け出すことができない。一つの業ともいうべきであろうか。

作らずに居れぬから作る、叫ばずに居られないから叫ぶのだ——というまでに至らなければ本物と云えないだろうけれど、締切が迫まるから何とかして数を揃えて出すのだという状態から私たちは脱していない。

これでは人の心をうつ川柳のできる筈がない。大きく云えば後世に残る命ある句などは一つも生まれにくいという事である。誌代を払って締切に一〇句投稿してその内の幾つかが自分の名前で掲載されたからヤレヤレという

のでは誠に哀れである、情ない。そうは思いながら今もせかれせかれて同じことを繰り返したのであるけれど……。

いかなる文芸も所詮は人間の叙事詩・抒情詩である。その人でなければ訴えられないものがある筈である。ささやかながらでも私たちの「思い」を刻み残して置きたいものである。

時事吟の可否

古川鶴声

或る句会で或る選者の言葉に時事吟は何の役にもならぬ影の薄いもので、すぐあきらめられ、消滅の句であるような事を云っていたが、私は反対で時事吟こそ歴史に残るものと考えた。時事吟こそ、永久に残る世相の移り変りに依って参考資料にもなる大切なものと思う。何故時事吟が大切かと言え、作句時代の世相を反映出来るからである。普通（ありきたり）の句では作句時代の世相を反映する事は出来ないものである。時事吟ならば、作句時代の政治家の行動、庶民の日常生活に欠け事、の出来ない物価、売おし買溜め、財閥の横暴と閣僚の袖の下、政治資金の使い途等々数限りない事が明らかに作句されているから、句を読めば、その当時は反映（想像）されるのである。私は他人がどのように言われようが、句会で全部没句になろうがそんな事は関係なく、大いに時事吟に取り組んで行くつもりである。選をする人に限って、我

れより偉い人は無いような口振りを時々耳にする事があるが、先ず自分の句を考えた上で批判する事が肝要かと思う。作句者が十人寄れば、十人十色で様々の角度から作句しているのである。それも充分見抜いた上で批評する可きと思う。但し作句から「この句はどうでしょう」と問われた時こそ「これはこういうした方が無難ではなからうか」と教えてこそ選者としての価値があるように思う。

四十九年度本社句会ベストテン 静馬氏が連続トッポ

谷垣史好

またしても静馬、一三夫両氏の一騎打ちとなった四十九年（一月—十二月）本社句会入選トッポ争いは、僅か一句の差で前年に引続き静馬氏が連続首位の座を確保された。本社句会皆出席の記録とい、同氏のこの精進には脱帽のほかにない。（公平を期するため選者吟も計上、三句以内厳守）

▽四十九年本社句会ベストテン（敬称略）

- ① 傍島静馬（七十六句）
- ② 不二田一三夫（七十五句）
- ③ 若本雀踊子（五十九句）
- ④ 小浜柳太（五十五句）
- ⑤ 本多柳生（五十三句）
- ⑥ 中川滋信（五十一句）
- ⑦ 阪上千止庵（五十一句）
- ⑧ 若本多久志（五十句）

⑨ 笠原吸江 (四十九句)

⑩ 香川醉々 (四十九句)

なお参考までに十一位から二十位までを記す

⑪ 鬼遊 (四十八句) ⑫ 美幸 (四十七句)

⑬ 維久子 (四十六句) ⑭ 文秋 (四十四句)

⑮ 小松園 (四十四句) ⑯ 水客 (四十三句)

⑰ 百酒 (四十三句) ⑱ 太茂津 (四十一句)

⑲ 好一 (四十句) ⑳ 天笑 (四十句)

上位二十人ほどは同じ顔ぶれのように見えながら、やはり年々、新陳代謝がある。水の表面は動いていないようでも、底の方では激しい流れが渦巻いているのであろう。五十年は、このうねりが表に出てきそうな気がするのだが……。

天位入賞二回以上の方は次の通り。

▽六回〓醉々▽五回〓柳志▽四回〓生々庵
水客、美幸▽三回〓一三夫、牧人、鬼遊、花
梢、夕花▽二回〓小松園、静馬、維久子、滋
雀、雀踊子、太茂津、葛城、十止庵、冬二。

世相七十四年いろは川柳

本多柳志

い 一億円かけて連れて来たのにブラジルへ
ろ 論よりも倉庫洗剤山と積み
は ハイジャック知らぬ国までただで行け
に 二十円はがき投句も高くつき
ほ 保険金三億妻子水に漬け
と ペンクラブコリアにこりてペンを投げ
倒産はどこ吹く風と公務員

ちぬりおるわやかたそれつねなむらのうやくまけふこえあてきゆめ

中東はドルと兵器をよせ集め
律義者、貯金する程金が減り
盗っ人も最高裁で無罪なり
類は友を呼んで集る雷族
おふくろの味を都会へ食いに来る
詫び入れて何でも済ます大企業
角さんも金にはよい詰将棋
横綱が勝って大きな記事になり
タレントの夢はスターか参議院
連休を喜ぶ子らへババが泣き
それから聞いて貰えぬ田中節
次はどちらが危い爆彈魔
狙っても当らぬ魚雷一発一億円
謎を解く時間もやらず絞首刑
ラロック証言核はだまってもち込まれ
無駄使い怖い会計検査院
氏よりも学歴だけで目利きされ
農民もびっくり米が高くなり
果報寝て待てば次官のイスが来る
安ものをだしに集める百貨店
待つてもむづに帰る海もなし
けられても辞めぬ糸山見直され
文化財高松美人士の底
古稀美人デトリッヒも嫁ぎに来
英雄にされて長島涙ぐみ
電話三分話し切れない砂時計
あつと云う間に消えてしまったストリーカー
佐藤さん驚き桃の木平和と賞
金大中人のうわさも六カ月
雪男探し出したい鈴木君
メイドインジャパンカメラからギリラまで

み ミニ消えて男天下の秋を知り
し 人命はカーより軽しガス規制
ひ 平沢も浮世の風は四十日
も モナリザの笑顔へ今日も列ばされ
瀬戸内もあわれ油の海にされ
す スプーンを曲げた子供に騙される

川柳雑感

関美子

絵は単なるデッサンあり水彩、油絵のたぐいからサイケ調まで種々雑多、だが日本画的なものは少なく、やはり川柳はきれいなことでは共感をよばない所以であろうかと考える。それにしても言葉とは不思議な生物、自分はいかに削るかに苦慮するくせに、読む立場にまわる時、十七字を何十倍にも大きくふくらませて、絵にまでして受け取るのであるから。

私は柳箋に向ってギンギラギンでは句が作れないし、課題があるとしてそれがじやまになって本来の自分が出せないでいつも不本意に思う。いい句が出来る時は構図より先きに言葉が飛び出して来るから、その時メモらなくてもずっと忘れない。せつけんの泡で手が離せなくても、ラッシュの中でも大丈夫だ。

たまたま風邪で寝込んで時間をもて余している時など友人は器用に作句するので羨しいが私は唯ビリビリした神経と焦りに悩まされて一句も出てこない。そこには生活感がないせいかしら。家事雑用に追われ時間に余裕もな

く動きまわっている時に佳句にめぐり会ふ。
いい句を作り伸すにはやはり良き師を得る
ことだとも思う。

私は何気ないマスコミへの一投句から路郎
先生を知った。一葉のハガキを戴き心の目を
開いて物を見よと教わってから、子育てのため
のブランクもあつたけれどもどうか今日ま
でついて来たことを幸せだと思っている。

俳風柳多留研究廿五篇から

山添眉水

柳誌といえはいたずらに作品ばかりを羅列
したり、ひとりよがりの選評や雑文の多い
中で、川柳塔がこういつた研究文を長年に亘
って掲載されているのには、心から敬意を表
するものです。さて取題句として

ずぶ六の客へ鉄鎌素湯で出し

の魚の鉄鎌が問題になっており入江氏の説中
鯛の頭部には三個の骨の形がそれぞれ鉄鎌
に似たものがある云々とありますが、スキ、
クワはどの部分に当るのか知りませんが、多分
上顎と頭部の中骨がそれに当るのではないで
しょうか。当大阪ではむかしから魚の下顎か
らエラにかけての部分のカマといって現在で
も賞味されています。またずぶ六は泥酔であ
って二日酔ではないと思われまふ。

なお二日酔や酒の飲み過ぎにはハチミツ大
サジ一杯をなめればたちまち効果てきめん
といわれております。

柳々会越前岬を行く

橘高薫風

川柳塔の常任理事有志の会である柳々会は
旧臘二十一日(土)二十三日(日)の両日、
越前岬に遊び、紙漉きの里、陶芸の村を見
学、名物のそばや蟹に舌鼓みをうち、小雪ち
らつく海岸美を観光した。玉川温泉で一泊、
あわたらしい歳の瀬を都座から離れた十五名
は、淡雪とちらほら咲きの水仙に清冽な北国
の情緒を満喫した。今回は又お世話戴いた畑
尚山氏にお礼申し上げます。一行は、西尾
葉、同令姉、若本多久志、菊沢小松園、同夫
人、島居百酒、同夫人、阿部柳太、藤岡花
梢、藤村メ女、和田維久子、氏家キミ、板尾
岳人母堂、橘高秋、同薫風。

「紙」

襖とて団地は和紙でないのなり
神様が在すあくまで白い紙
紙一枚左遷の父を見送る駅
紙一枚男一匹左右され
紙の里今日も吹雪の色で暮れ
詫び状になるとは知らぬ和紙となる

紙漉きの里に歴史を偲ぶ旅
書いたものという紙の古びよう
和紙をすく女歴史をくりかえし
一枚の和紙人形の顔に生き

◇川柳塔社常任理事会(49・12・4)

運営委員の方々には経営方面でのベテラン揃
いなので、インフレ、不況ムードなどによる
経営難を説き、本社財政の建て直し等を慎重
に検討。それには同人各位のご協力を乞ねね
ばならぬが、まず50年の嵐の中を行く体制を
固めることになった。

また発表のとおり四月号から橘高薫風氏選
による第3の雑誌など、本誌刷新の案も着々
進められ、日ごろの笑い声も消えた常任理事
会だった。そんな重苦しい空気の中へ、和歌
山の野村太茂津氏からの陣中見舞いが、美味
この上なしという紀州みかんだ。ホッと気分
のほぐれたところで閉会となったが、生々庵主
幹からの「日川」発足の説明にやや明かるい
光りが流れた。

出席・多久志・水客・いわを・静馬・百酒
・柳志・薫風・葉・文秋・生々庵・太茂津・
小松園・一三夫(敬称略)

黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般

合資
会社
西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 06 三四五二一四
夜間 06 四四〇八

鉄児さんを偲ぶ

浜野奇童



つたのである。

氏が川柳に手を染めたのは、昭和二十四年五月だったと聞く。一年おくれて私が弓削川柳社に入会したときには、すでに「不朽洞会員」として、弓削の大幹部でもあった。

当時大阪から奥さんの郷里である弓削に店を構えたばかりで、弓削っ子でない氏には殆んど馴染もなかった。それが、弓削平の「川柳町づくり」に深く共鳴、結局生涯をこのために捧げることになったのである。昭和二十七年会長を引き受けた頃は、文字通り弓削のどん底の時代であった。やりかけたら、トコトンまでやらなければすまない氏は、

「生活に密着した川柳」を標榜、仕事場の壁から天井まで川柳短冊をはり、立寄る人に川柳を説き、柳人のアイデアに耳を傾けながら、新しい企画を次から次へと打出していった。まさにブルドーザーともいうべき活動であった。殆んど面識もなかった町長を説いて、町の協力を取り付けた話は有名である。

その鉄児さんが最も頭を痛めたのは、川維支部返上の動きであった。義理堅い氏には、

路郎師に背くことなど到底考えられないことだったのである。私も毎晩毎晩相談を受け、幾度か親書もしたためた。けれども大勢に逆らう術もなく、長女郁子さんの心臓手術を期に一時会長を片山巷雨にゆだね、「川柳町」の基礎を固めていった。

郁子さんの二度にわたる心臓手術と、長男雅生くん就職を期に、「家族揃って生活できるこそ人生の最大の幸せである」と、なれない仕事を求めて上阪されたのは、三十八年である。

「川柳にすべてを打込んでいた弓削を離れてから、私の作句意欲は年々低下しつつある。ひと頃川柳製造機とまで言われたこともあったが、今ではその面影すら残っておられない。環境とは恐ろしいものである。現在私には川柳を語る人もなければ川柳をわかってくれる人も身近におられない。(中略)いつまでつづくやら生命のある限り川柳の灯は守っていきたいと思っている。」(昭和四十三年川柳町)最近、川柳塔にもめっきりお孫さんの句が目だつ。そして、長男も一人立ちされた今、

お別れへ馳せれぬ焦りの掌を合わせ

奇童

鉄児さんの計報を耳にしたのは、十二月九日も夕刻、私の義母の通夜の席のことであった。寝耳に水とはこのことであろうか、とまどう弓削の幹部の声を受話器の底に聞きながら、信じられない報に焦点の定まらぬもどかしさをどうすることもできなかった。

多量の薬と食事に人一倍気は使っておられたが、会えばいつも弁舌のさえる、大久保彦左「鉄児」であった。そこには、糖尿や脳軟化での入院の過去さえ想像させなかった彼だ

地域老人クラブの発足により「十年目でや」とここの人と話せる機会ができました。」
「八尾の大会には、弓削でお世話になった榮さんに、あなた（奇童）に変わってお礼を申し上げるために参加したら、ものすごい好成績でした。老人クラブに川柳の種を蒔きました。」の音信が最後になってしまった。昨年の同人総会の積極的な発言が耳から離れない。十年ためた川柳への情熱が、ここ半年の間に一度に燃えつきたようで空しい。

鉄 児 句 抄

二階借気のないアババして上り着せかけりや男嬉しい顔で去に
そも物を尋ねる腰になつていず
盃をためたまんまで座を外し
アラヨイショくくと下戸も負けとらず
水に写つて見れば我家も美しく
なつかしきものに砂糖の甘さかな
いっそ何でも食べたらかと思えども
買うまでは動きませんと居握わられ

もう聞けぬしわがれ声

12月5日にお声を一7日にお便りを一そして9日には悲報を、

不二田 一三夫

新年号の追い込みにかかっている12月9日夜、鬼遊さんから電話で、
「福島鉄児さんが、きょう急逝された」とい

う悲報である。岡山の紫光氏から生々庵主幹「榮氏」鬼遊氏と涙のリリースがあったわけ。さっそく岳人氏に連絡して薫風さんと相談してももうよう頼んだことだが、実はばくのはうも愚妻の母が死んだという電話があつて、編集者中ではあるしどうにもならず、また親類づきあいのわるいことをしてしまった。（川柳塔になってからも実父が死んだが、この時も編集者中から、誰にも知らず、弟妹たちになかせ焼香にだけ走ったことがあつた）——こんなことは新聞や雑誌関係者の宿命ではあるが……

さて——鬼遊さんから電話のあつた日、編集室へ鉄児さんからの葉書がぼく宛に来ていた。文面から察すると七日に投函されていた。帰ってから夜中に銭湯へ行くときに返事を書いて出すつもりでいたのに、あの悲報だった。

「だんだん世の中も暮れの忙しさになってきました。やれストだとかで国民の迷惑をもの考えぬやり方には腹の立つ次第です。こんどの郵便の遅配もこれが原因、後遺症の残り。多大の損害をこうむっているのはいつも国民だけです。田中から三木に変わってみても、今の世が変るものとは期待出来ません。」

先日突然電話をかけてご心配をおかけしました。（註）12月号末着で拙宅へ五日の夜、電話があつた。その時は、あの独特のしわがれ声もお元気だった）川柳塔は昨六

日に到着しました。インフレで、ますます物価上昇を加えて来年から郵便料金値上げ等、どれを見てもお先き真つ暗な状態です。何一つ明かっていることのない中で、春果先生の退院がありまして。川柳塔にはこの項に關し一行の報告がありませんが、御承知の事でしたのですね。春果先生からのお便りに依りますと、10月22日退院、目下歩行練習中ですとのこと、句集「聴診器」一応先生の方へ申し出ておきました（註）著者からはかねてご寄贈されることになっていた）

葉書の表面へ回わつて——。

さて私事です。一日（12月）老友の葬式の当夜吐きまして、それ以来急に体調が崩れ、食欲不振、疲労困憊、歩行困難、心臓あっぱく、睡眠とれず、息苦しさが増しくなり、排尿は少なく、全身浮腫、一週間に四キロも体重が増え、とうとうダウン、六日より休業の止むなきになり商人お手あげとなりました。二週間の絶対安静とのこととで病名は心不全原因不明、誠に困ったことです。葉子さんへよろしく。

柳友の遺書めいたおたよりは、これまでに相対いただいたが、鉄児さんほど胸をグイグイ突いてきたのは始めてである。

文面もハッキリしているし、達筆のあとも見事で、おそらくあと三日間の生命とはお気づきなかつたこととおもう。雑誌編集者の経験者だけにぼくのためにもよく理解者だったのに……悲しいことですねア……。——合掌

藪

竹内翁童選

山に住み藪蚊に負けぬ面が出来
紫宏
犯人は藪蚊であつた背中の子
伊津志
台所こんな藪蚊まわり山
古心
頂上の坊で藪蚊をたたく秋近し
春季
この藪が春のお宝持つてくる
春日
やぶへ来て歌で恐怖の氣をしずめ
茶人
驚へ去年は泣いた藪が無い
どんたく
尺八の名匠材を選ぶ藪
香珠夫
背丈こす藪に手を焼く休耕地
代仕男
竹藪の竹へ不吉な風がなる
祥月
竹藪を画いて虎の絵らしくなり
肖二
鬼の目に竹がゆれてるかくれんぼ
暁明
藪蔭で泣いてゐるよな紅椿
バット
藪の中から屍体の指が手招きし
七面山
竹藪が舗装道路を越えて伸び
露子
雪どけの音藪から聞える昼下り
道子
竹藪へ雀が恋を捨てにくる
好一
十五夜の月が知つてた藪の奥
洛醉
富士山麓の藪が自殺の名所とか
綾女
竹藪の下に高松塚の謎
木魚

竹藪の恋蚊を叩き蚊を叩き
悠泉
竹藪も切れと分け前狙うてる
不二
開発へ藪法外な値で売れる
素身郎
生産調整先祖に済まぬ藪となり
可住
あわだち草むかしささ藪あつたと
度
藪消して鳥追いセメンの都市とする
正彰
お隣りの藪から筍躰を越し
無人
大藪があるらし筍躰を越し
ろ亭
藪の竹身ぶるいをして雪払う
三十四
ざわざわと風が奏でる藪の歌
右近
藪蔭に見つけて嬉し露の薫
一風
足音がくつ付いてくる藪を抜け
千翁
激情の二人は藪の中に消え
思月
自転車でなにか竹藪すてられる
宵明
嵯峨野に竹藪があり京の味
重人
藪のかげ孤り咲いてる梅の意地
武雄
藪蔭の小径も舗装して飛鳥
本蔭棒
藪の中むかしロマンの花が咲き
藤持
試歩の藪鳥驚かさな歩幅
どんたく
佳
竹藪の樹氷の花が咲く詩情
悠泉
チョン髷とふと出合いそう藪の道
古方
藪鳴らす風に尼僧は過去を追
登美也
藪深い里に残した母ひとり
豊生
竹藪を背に地藏さん男前
千翁
人
地
広重の目に一幅の藪の雪
英詩

雄弁

山内静水選

京の四季藪はしずかなワキ役に
寿美子
天
藪の根は黙々藪を育てあげ
白水
ご先祖にすまない竹藪だけ残し
軸
雄弁家泣かせるとこも一つ入れ
一風
雄弁へ今日は言わさぬ式次第
晩明
雄弁にうつとり女だまされた
伶人
青雲の志あり雄弁家
一郎
煙がられるとも知らぬ雄弁家
素身郎
原稿のミスに気付かぬ雄弁家
三十四
雄弁と裏腹私腹肥やしとり
三十四
真実のひと言雄弁家を押え
翁童
雄弁がいつか負けてる無言劇
かつみ
雄弁を競うてPTAの女史
どんたく
よっぽどのネタ雄弁がとまらない
古方
雄弁に憶面もなく嘘をつき
真祐
雄弁も時の流れに逆らえず
松花
雄弁を買われて婦人部長です
無人
雄弁な妻主婦連に籍を置き
英詩

出るところを出て雄弁となる男 白水
 救国の大雄弁に夕陽燃ゆ 松花
 雄弁になり信念が曲げられず 千翁
 弁舌さわやかに人様を中傷し 宵明
 弁舌もさわやか恩師に金を借り 思月
 人情にもろい雄弁さわやかに 千翁
 仲人の雄弁しびれ切らされる たもつ
 見違える程雄弁になるデイト 露子
 仲人を雄弁にして祝酒 春巳
 先様は雄弁ぞろい披露宴 本蔭棒
 奥様さんは折紙つきの雄弁家 七面山
 針小棒大雄弁家のマジック 度
 雄弁にまくしたててる口の巾 祥月
 雄弁な口は明日にもオープンし 木魚
 雄弁なセールス役者にしたいよう 道子
 雄弁を完璧にする吾が履歴 いわを
 雄弁のペース己が声に惚れ 軒太楼

人 地 天

一生一代の雄弁親を承知させ 寿美子
 軸 鳴り止まぬ拍手に雄弁家の絶句
 雪 景 色
 尼 緑 之 助 選
 雪景色一色なれど古都の味 章雅
 山彦の声も凍った雪景色 伊津志
 山まり皆雪の中なる露天風呂 一風
 婦省子に実感となる雪景色 松花
 吹雪く夜の黒点となり修業僧 軒太楼
 背信を無言で攻める雪景色 宵明
 宿の傘借りて見歩く雪景色 一郎
 桃色に肌輝かす朝の富士 白
 雪景色引き立て役となる斜光 魚水
 食糧はエスオーエスの雪景色 魚山
 シュプールを起伏に残す雪景色 貞祐
 さい果ての岸打つ浪に注ぐ雪 香珠夫
 流水に乗って石狩川の雪 露子
 雪景色はめてもおれぬ急ぎ旅 たもつ
 雪見酒めったに降らぬとこに住み 古方
 雪景色見てる雀もふところ手 無人
 ローカル線だけ動いてる雪景色 右近

夜の底に雪がまたたくファンタジー 翁童
 すっぱりと生活の渦を雪包み 紫宏
 落日はふるさとのもの雪景色 千翁
 雪景色足を頼りの朝を出る 茶人
 傘さして大根までの雪景色 豊生
 湯けむりの中にひととき雪景色 保夫
 病窓を細目に開ける雪景色 本蔭棒
 雪景色忠臣蔵を引き立てる みのる
 春の芽を膝下に抱く雪景色 英詩
 遭難の担架がむごい雪景色 悠泉
 新雪をふみしめ若い山男 敏
 雪便りまぶたの奥の槍穂高 春巳
 目的地バス着くまでの雪景色 綾女
 借景に佳人を置いた雪景色 肖二
 炉辺に恋あたたまる雪景色 三十四
 雪溶ける音へ春聞く北の国 どんたく
 行商の明日を気にする雪景色 代仕男
 雪景色場末しんみり暮れかかり 同
 雪の城カメラの角度変えて見る 祥月
 雪景色そろそろ失保切れかかり 登美也
 富士の雪映して五湖に陽が落ちる 春日
 地 キャンパスの色が出て来ぬ雪景色 祥月
 天 湯どうふは京の呼びもの雪景色 いわを
 軸 盆栽の被害に気づく雪景色

(ふきげんな雨が西風引き連れる)
北風さん手ぶらで来ずに雪連れて
(北風にうちまたがって冬將軍)
朝風に吐く息強し走る予ら
(登校へ煩っぺが紅い風の予ら)
せちがらき世にせめて風柔かに
(せちがらき浮世へ風よそと吹け)
枯尾花風になぶられなよなよと
(枯尾花風のところにさからわす)
風に舞う落葉のゆくへさだめなく
(風に舞う落葉へ思ふこと多く)
木枯の吹くやもみじの散り果てて
(木枯の無情もみじを掻きむしる)
(木枯の爪にあえなく紅葉果て)
そよ風の吹けば山茶花バツと散る

同 駒子
つ ね
同
失 名
つ た
同

(山茶花のあわれそよ吹く風に散る)
隙間風ほど良く換気してくれる
(隙間風換気扇だと負け惜しみ)
若者はおもてをあげる向い風
(北風へ真すぐ向いて行く若さ)
今日までは風も嵐も乗り越えて
(乗り越えた港に波も嵐もない)
もの思う肩に落葉の風が吹き
(風に舞う落葉が誘うもの思い)
(思慕の肩落葉の風に叩かれる)
年の瀬は風も冷たい倦怠期
(倦怠期師走の風にあなどられ)
風邪薬あすも休めぬわが身なり
(風邪薬あすも休めぬ身のあわれ)
神妙にご幣の風に結ばれる

満津子
同
秀 村
濁 水
藤 持
同
比呂路

雅号ぶつちやけばなし

(137)

そんぶうし



すずき

鈴木村 諷子

昭和二十五年頃適当な雅号をがなと考
えていた折、郵便局長をやっている村の
友人がフト洩した「村夫子」の語にヒン
トを得て、村に住み社会を人生を諷刺して活きるべ
く、もじったものです。おっとりとして私の性格に合
った雅号だと今でも私なりに満足しています。本名と
違い雅号は自分の意志で決められる良さがあります。
本名に言わしめれば雅号は嘘です。人を欺くには先ず
自分を騙すことと、雅号を持った当時はじっくりせぬ
期間もありましたが、今では本名より通用するほどに
慣れました。ヒントの村夫子に位負けしたのか今だに
作句に上達のない私です。

(農業 六十八歳)

台風も変りものかやUターン
(気まぐれな台風Uターンして戻り)
陸橋の足をせかせる師走風
みの虫がじっと耐えてる風の音
(越冬のみの虫風に雨に耐え)
(風に耐えみの虫春を信じきり)
訪れる人なき窓を風叩く
(独り居をおとなうものは風ばかり)
風当りが強く悪者にされている
(悪者にされてるらしい風当り)
風当りよけて八方美人なり
(八方美人になって風当りをよける)
風流を好み変屈者にされ
(風流人と言われ変人とも言われ)
風が火を火が風を呼ぶ因果律
貧富の差知らず無常の風きびし
北風のタクトへ枯葉乱舞する
求人の旅へ北風つきまとう
たとえばの話に案外の向い風
思い出の風が五体を吹き抜ける
昼風呂で夜の作戦ねるマダム
老母が限りの限りわが家の風呂の順
かば焼の睡のみこます風の向き
風邪五日ぐらいで骨が浮き上り
ロザリオの尼さん冬の風を切る
風流を真似た梅見が風邪を引き
社会鍋へ吹く風だけはあたたかい

同 重人
同 茂美
保 夫
道 子
同
同 度
同 翁童
同 祐
同 美
同 人
同 静観堂
同 軒太楼

題一足―二月二十日締切(四月号発表)
宛先 倉敷市下津井一―九一三四 千七一一

本田恵二朗

第二百八十三回（五十年第一回）

大萬川柳

「扉」 入選発表

選者 川村好郎
 投稿総数 四百八十三句
 入選 五十八句

自動ドア情性の音となるさだめ

富田林 花梢

和解してからの扉の軽いこと

貝塚 つき子

産院の扉を父の顔で押す

大坂 凡子

鳩時計もうお休みと扉しめ

大坂 文秋

平凡なドラマが始る扉開く

大坂 与呂志

求婚へ扉ひらいてくれそう

大洲 暁明

締め切った扉をあける愛の詩

富田林 維久子

友情が失意の扉あけてくれ

香川 酔夢

御屏が閉っているから有り難く

和歌山 としよ

いつからか夫婦の扉錆びたまま

今治 宵明

労資握手胸の扉は閉じたまま

笠岡 古庵

記者溜り扉邪険に扱われ

決心と自動扉にゆさぶられ

和歌山

太茂津

民主主義の手法を示す自動ドア

和歌山

吸江

仮装の灯もゆるバーの扉押す

和歌山

万作

かたくなに扉を閉ざす寡婦の知恵

和歌山

柳志

社長室の扉がね返す労働歌

大坂

柳志

組織解散扉の外の寒い風

大坂

柳志

かたくなな扉は愛の鍵で開き

倉敷

白水

運命の扉は神に委せきり

大坂

弘生

扉閉め女ノックを待ちつづけ

大坂

弘生

ためらいを自動ドアにからかわ

大坂

清人

ドア閉め隣りは隣りうちばうち

大坂

清人

自動ドア美しい窓送り出し

大坂

清人

ノックしても扉があかぬ片思い

大坂

清人

人生の扉に挑む夜学の灯

笠岡

白梅子

出直せと扉叩いてくれた亡母

八尾

幸

この扉開けば子が居る妻がいる

八尾

幸

人間不信心の扉閉じた切り

鳥取

洋々

借金取りとは知らず自動扉開く

鳥取

洋々

かたくなに扉を開けぬ日の孤独

鳥取

洋々

たしかめる愛の扉をノックする

鳥取

洋々

開け放つ扉の中に嘘はない

大坂

好一

裏口の扉札束積みめば開き

鳥取

洋々

伴せは冬の扉の中にある

八尾

美幸

それからの女扉を護っている

貝塚

つき子

ほどほどに泣かせ火葬場扉閉め

宝塚

静馬

扉の外へ出てから涙出る見舞

和歌山

佐知子

人ノ句

人ノ句

住

あなただけ開くノックを待つ扉

兵庫

可住

地ノ句

岡山

翁童

銀行の扉軽い日重たい日

天ノ句

神戸

悔いのない一日へ謝し扉閉す

選者

吟

善悪不問神は扉を開け放し

西宮

多久志

昭和五十年

ベストテン (十二月現在)

一	洋々	四、五	鳥取	九	吸江
二	静泉	四、〇	神戸	一〇	万作
三	美幸	三、五	八尾	一一	柳志
四	好一	三、〇	大阪	一二	太茂津
五	翁童	三、〇	岡山	一三	一、二三
六	多志	三、〇	西宮	一四	弘生
七	つき子	二、五	貝塚	一五	清人
八	白水	二、〇	倉敷	一六	白梅子
				一七	可住

二、〇	藤井寺	一八	佐知子
二、〇	和歌山	一九	静馬
二、〇	大阪		
二、〇	和歌山		
二、〇	堺		
二、〇	大阪		
二、〇	大阪		
二、〇	兵庫		

昭和五十年第三回

「壁」

五句以内

第四回

「時々」

五句以内

締切 三月二十日

(ご投句はハガキでお願いいたします)

ます

投句先

〒591堺市堀上緑町一の三の七

藤井一二三方 大萬川柳係

第二十二回大萬川柳大会

二月十六日(日)午後一時於大萬

(詳細川柳塔一月号参照)

句(苦)作

傍島静馬

昭和四十六年九月末、現在のコーポに移ったが、明け方八階の窓から見える「雲海」がとても印象的だったので、そのうちいつか句にまとめたかと思っていた。

そのころ開設された、電波新聞柳壇(橋高薫風氏選)に、毎週投句していたので、同年十二月一日、試みに

「陽のあたるところから雲海晴れてくる」と出してみたが抜けなかった。

翌四十七年六月二十一日、こんどは

「雲海に透いて六甲朝焼ける」とやってみたが、これまた没になった。

自分には、このような自然を句にするのがむずかし、苦手なので其後、忘れるともなく忘れた形になっていたが、偶々、昨年、四

十九年十月二十三日にやっと物したのが、

「雲海に 峙つ山頂 島となる」である。

雲海に浮上る山の峰を、島に表現したいとは、かねがね考えていたが、そのうち、ふと辞書から「峙」という文字を見付け、この文字を組合せて練りあげたのがこの句である。語感もよく聊か自信をもって投句したので、運良く入選した。

思えば昭和四十六年九月から、四十九年十月まで、三年余り、殊更「雲海」ばかりに、こだわっていたわけではないが、知らず知らず、心のどこかに抱きつづけていたものが、漸やく陽の目を見たわけで、柳歴二十数年、不断の精進にもかかわらず、未だに会心の句を、物にできないのを残念に思っているが、今度のように、長い年月を費し、苦手の「雲海」を兎に角一応こなし得たことを、大へんうれしく思っている。と同時に、今更ながら、川柳のむずかしさ、奥の深さを、しみじみ痛感した次第である。

★

十一月号(49年度)

「辞世の句」の直原七面山氏へ。

一死に仕度出来ず辞世句先き走り

一枯れ果てるほど川柳の井戸浅からず

一あと千句作れば立派な句も出来ん

それでもなお辞世の句に執着されるなら、惜し気なくそれをご披露すべきだと思います

が、いかがでしょうか。それが川柳というものだと愚生は思います。

一辞世の句選び迷ってまだ死ぬぞ

(伊丹市・櫻谷漫柳)

★

本年度の大萬川柳へ10位に進出した佐々木

静泉氏は同人になってまだ一年にもならず、

文字どおりの新人です。有望な新人発掘にう

き身をやつしているばくに、

一税金ればこそ神戸まで追ってきた

広島だったかから神戸へきた当時の氏の作

品に注目し、やがて氏の作品から学校の先生

ということが分かったのです。そして同人句

集刊行に際し同人として迎えたわけ。(不)

柳界展望

(原稿締切毎月末)

川千津子宛。

送料共五百円。

幸生、大路美幸、菊沢小松園諸氏。

▲49年度平安賞作家は長藤泰敏氏と前田美巳代さんが選ばれた。美巳代さんは川柳塔時代から注目されていた好作家。自選10句のうち

▼川柳研究(十二月号)の復刊三百号記念号へ山路閑古、宮尾しげを、岡田甫、三浦太郎九四大家が執筆。P 64—五百円。

▼紋土一月号は福島鉄児氏急逝特集。浜野奇童氏ほか追悼文一合掌。

一傘を持たぬおんなと歩く裏切れぬ一美巳代。

▼後藤閑人句碑建立基金、一口千円何口でも可。申込先〒980仙台市東八番丁一七〇宮城野社。句は「果箱木に少年愛をふくらませー建立本年五月」

▼高鷲亜鈍氏(寝屋川市)は備北新聞へ「新春三段話」を執筆(一月五日付)

▼日本川柳協会の大坂に於ける常任理事会の開催日が1月17日—3月20日—5月16日—7月18日—9月19日—11月21日。会場は日川協事務所ときまる。

▼市川鱗魚氏(岐阜市)還暦が過ぎてから急に一年が早くまりました。

▼伊藤柳涯子氏(東京都)旧ろう新宿で東野大八氏と会い、話が川柳に及び「麻生路郎物語」を読めとのことで、早速購読することにしました。

▼麻生霞乃先生はこの二月二十四日で満八十二歳になられる。旧ろう薫風氏や阿茶女史が生駒を訪問、霞乃先生のご健康をよろこばれた。

▼直江武骨氏(小樽市)は49年11月3日小樽市教育文化功労賞を受けられた。

▼池口吞歩氏(川柳年鑑編集委員)や小泉戸牟氏(中部日本新聞社記者)から「麻生路郎物語」は川柳史上、画期的な読みものになった。十二月猫もいっしょに昼を抜き—柳志。

▼第五回紋太忌川柳大会は四月六日10時から神戸木材会館5階大ホールで開催の予定。兼題—交替・力・練習—ひらかな・めぐる・段(2句)宿泊申込み2月末日締切—〒653神戸市長田区水等通6丁目7—15前(石川一郎方)から発行。

▼全国古川柳研究誌(第三号)が〒168東京都杉並区浜田山三二〇—一〇

▼金子吞風氏(上田市)12月号の秀句抄拝見、さすがに抜き—柳志。

▼川柳人(五一三号)で高木夢二郎氏急逝後の編集は三室天翠氏、柳灯集選者を大石鶴子氏と発表。

▼きしせん(発行・高橋操子)第24回市民川柳大会号に生々庵主幹の柳話「笑い」が活字となっているが幼児の笑いには専門家としての有意義な話だけに興味深い。同大会入賞者(本社関係)は高杉鬼遊、内海

▼若本多志氏(西宮市)は「けいさつ」の友—川柳漫筆へ、十二月あれこれを執筆—十二月猫もいっしょに昼を抜き—柳志。

▼川柳道場(水粉千翁編集)二二〇号は作品合同互選会「顔」を発表。川柳塔から川村好郎、浜田久米雄、中島生々庵、西尾葉、本田恵二朗、橋高薫風諸氏が選者として参加。

▼川柳道場(水粉千翁編集)二二〇号は作品合同互選会「顔」を発表。川柳塔から川村好郎、浜田久米雄、中島生々庵、西尾葉、本田恵二朗、橋高薫風諸氏が選者として参加。

▼市川鱗魚氏(岐阜市)還暦が過ぎてから急に一年が早くまりました。

▼川柳道場(水粉千翁編集)二二〇号は作品合同互選会「顔」を発表。川柳塔から川村好郎、浜田久米雄、中島生々庵、西尾葉、本田恵二朗、橋高薫風諸氏が選者として参加。

▼市川鱗魚氏(岐阜市)還暦が過ぎてから急に一年が早くまりました。

▼伊藤柳涯子氏(東京都)旧ろう新宿で東野大八氏と会い、話が川柳に及び「麻生路郎物語」を読めとのことで、早速購読することにしました。

▼川柳道場(水粉千翁編集)二二〇号は作品合同互選会「顔」を発表。川柳塔から川村好郎、浜田久米雄、中島生々庵、西尾葉、本田恵二朗、橋高薫風諸氏が選者として参加。

▼市川鱗魚氏(岐阜市)還暦が過ぎてから急に一年が早くまりました。

▼伊藤柳涯子氏(東京都)旧ろう新宿で東野大八氏と会い、話が川柳に及び「麻生路郎物語」を読めとのことで、早速購読することにしました。

▼川柳道場(水粉千翁編集)二二〇号は作品合同互選会「顔」を発表。川柳塔から川村好郎、浜田久米雄、中島生々庵、西尾葉、本田恵二朗、橋高薫風諸氏が選者として参加。

▼市川鱗魚氏(岐阜市)還暦が過ぎてから急に一年が早くまりました。

▼伊藤柳涯子氏(東京都)旧ろう新宿で東野大八氏と会い、話が川柳に及び「麻生路郎物語」を読めとのことで、早速購読することにしました。

▼川柳道場(水粉千翁編集)二二〇号は作品合同互選会「顔」を発表。川柳塔から川村好郎、浜田久米雄、中島生々庵、西尾葉、本田恵二朗、橋高薫風諸氏が選者として参加。

▼市川鱗魚氏(岐阜市)還暦が過ぎてから急に一年が早くまりました。

▼伊藤柳涯子氏(東京都)旧ろう新宿で東野大八氏と会い、話が川柳に及び「麻生路郎物語」を読めとのことで、早速購読することにしました。

▼川柳道場(水粉千翁編集)二二〇号は作品合同互選会「顔」を発表。川柳塔から川村好郎、浜田久米雄、中島生々庵、西尾葉、本田恵二朗、橋高薫風諸氏が選者として参加。

▼市川鱗魚氏(岐阜市)還暦が過ぎてから急に一年が早くまりました。

▼伊藤柳涯子氏(東京都)旧ろう新宿で東野大八氏と会い、話が川柳に及び「麻生路郎物語」を読めとのことで、早速購読することにしました。

▼川柳道場(水粉千翁編集)二二〇号は作品合同互選会「顔」を発表。川柳塔から川村好郎、浜田久米雄、中島生々庵、西尾葉、本田恵二朗、橋高薫風諸氏が選者として参加。

▼市川鱗魚氏(岐阜市)還暦が過ぎてから急に一年が早くまりました。

▼伊藤柳涯子氏(東京都)旧ろう新宿で東野大八氏と会い、話が川柳に及び「麻生路郎物語」を読めとのことで、早速購読することにしました。

▼川柳道場(水粉千翁編集)二二〇号は作品合同互選会「顔」を発表。川柳塔から川村好郎、浜田久米雄、中島生々庵、西尾葉、本田恵二朗、橋高薫風諸氏が選者として参加。

▼市川鱗魚氏(岐阜市)還暦が過ぎてから急に一年が早くまりました。

▼伊藤柳涯子氏(東京都)旧ろう新宿で東野大八氏と会い、話が川柳に及び「麻生路郎物語」を読めとのことで、早速購読することにしました。

▼川柳道場(水粉千翁編集)二二〇号は作品合同互選会「顔」を発表。川柳塔から川村好郎、浜田久米雄、中島生々庵、西尾葉、本田恵二朗、橋高薫風諸氏が選者として参加。

▼市川鱗魚氏(岐阜市)還暦が過ぎてから急に一年が早くまりました。

▼伊藤柳涯子氏(東京都)旧ろう新宿で東野大八氏と会い、話が川柳に及び「麻生路郎物語」を読めとのことで、早速購読することにしました。

▼川柳道場(水粉千翁編集)二二〇号は作品合同互選会「顔」を発表。川柳塔から川村好郎、浜田久米雄、中島生々庵、西尾葉、本田恵二朗、橋高薫風諸氏が選者として参加。

▼市川鱗魚氏(岐阜市)還暦が過ぎてから急に一年が早くまりました。

▼伊藤柳涯子氏(東京都)旧ろう新宿で東野大八氏と会い、話が川柳に及び「麻生路郎物語」を読めとのことで、早速購読することにしました。

▼川柳道場(水粉千翁編集)二二〇号は作品合同互選会「顔」を発表。川柳塔から川村好郎、浜田久米雄、中島生々庵、西尾葉、本田恵二朗、橋高薫風諸氏が選者として参加。

▼市川鱗魚氏(岐阜市)還暦が過ぎてから急に一年が早くまりました。

▼伊藤柳涯子氏(東京都)旧ろう新宿で東野大八氏と会い、話が川柳に及び「麻生路郎物語」を読めとのことで、早速購読することにしました。

▼川柳道場(水粉千翁編集)二二〇号は作品合同互選会「顔」を発表。川柳塔から川村好郎、浜田久米雄、中島生々庵、西尾葉、本田恵二朗、橋高薫風諸氏が選者として参加。

▼市川鱗魚氏(岐阜市)還暦が過ぎてから急に一年が早くまりました。

▼伊藤柳涯子氏(東京都)旧ろう新宿で東野大八氏と会い、話が川柳に及び「麻生路郎物語」を読めとのことで、早速購読することにしました。

▼川柳道場(水粉千翁編集)二二〇号は作品合同互選会「顔」を発表。川柳塔から川村好郎、浜田久米雄、中島生々庵、西尾葉、本田恵二朗、橋高薫風諸氏が選者として参加。

▼市川鱗魚氏(岐阜市)還暦が過ぎてから急に一年が早くまりました。

▼伊藤柳涯子氏(東京都)旧ろう新宿で東野大八氏と会い、話が川柳に及び「麻生路郎物語」を読めとのことで、早速購読することにしました。

▼川柳道場(水粉千翁編集)二二〇号は作品合同互選会「顔」を発表。川柳塔から川村好郎、浜田久米雄、中島生々庵、西尾葉、本田恵二朗、橋高薫風諸氏が選者として参加。

▼市川鱗魚氏(岐阜市)還暦が過ぎてから急に一年が早くまりました。

▼伊藤柳涯子氏(東京都)旧ろう新宿で東野大八氏と会い、話が川柳に及び「麻生路郎物語」を読めとのことで、早速購読することにしました。

▼川柳道場(水粉千翁編集)二二〇号は作品合同互選会「顔」を発表。川柳塔から川村好郎、浜田久米雄、中島生々庵、西尾葉、本田恵二朗、橋高薫風諸氏が選者として参加。

▼市川鱗魚氏(岐阜市)還暦が過ぎてから急に一年が早くまりました。

▼伊藤柳涯子氏(東京都)旧ろう新宿で東野大八氏と会い、話が川柳に及び「麻生路郎物語」を読めとのことで、早速購読することにしました。

▼川柳道場(水粉千翁編集)二二〇号は作品合同互選会「顔」を発表。川柳塔から川村好郎、浜田久米雄、中島生々庵、西尾葉、本田恵二朗、橋高薫風諸氏が選者として参加。

▼市川鱗魚氏(岐阜市)還暦が過ぎてから急に一年が早くまりました。

▼伊藤柳涯子氏(東京都)旧ろう新宿で東野大八氏と会い、話が川柳に及び「麻生路郎物語」を読めとのことで、早速購読することにしました。

▼川柳道場(水粉千翁編集)二二〇号は作品合同互選会「顔」を発表。川柳塔から川村好郎、浜田久米雄、中島生々庵、西尾葉、本田恵二朗、橋高薫風諸氏が選者として参加。

▼市川鱗魚氏(岐阜市)還暦が過ぎてから急に一年が早くまりました。

▼伊藤柳涯子氏(東京都)旧ろう新宿で東野大八氏と会い、話が川柳に及び「麻生路郎物語」を読めとのことで、早速購読することにしました。

花 公 栄 社

富田林市富田林町24—4
TEL 07212③2064

年の瀬を犬もこぜわしげに走り—庸佑。

金使え金使えとシングルベルが鳴り—一三夫。

数の子が高いかそうか買わんとけ—没食子。

女房にやりこめられる十二月—水堂。

百八つ節約せよと鐘が鳴り—三和。

十二月心の襖張り直す—代仕男。

来年は今年こそはの悔を積み—滋雀。

社会鍋政治の貧困など言わず—美子。

比類なき名曲として除夜の鐘—多久志。

▼尼緑之助氏（出雲市）は六月二十二日に予定されている島根県文芸大会の講師だが、川村好郎氏を招くことに決定している。

▼落合思月氏（東大阪市）は勲八等瑞宝章を昨年十二月五日受章された。

▼菊沢小松園氏（大阪市）

は、昨年末急逝された土井浩輔氏（大東市・元同人）の一月二日の告別式に岩本雀踊子氏と共に参列。ここにまた明治のにおい一人消え—小松園。（浩輔氏は大東市で川柳塔支部を企画中に入院されたもの）

▼花柳潮花氏（高槻市）から—春果先生の立派な句集を三人組（水客・紫香氏）もいただき、何かお祝いしたいと三人で考えています。

と。—潮花氏令嬢が府立病院に入院手術されるとのこと、ご全快を祈ります。

▼古川鶴声氏（八尾市）は1月12日前田伍健十五回忌川柳大会（西条市）へ出席。

▼岡崎祥月氏（松江市）から—川雑時代の松江支部で活躍した奈良井仙坊氏が死去されました。

▼不二田一三夫氏は新聞や雑誌の新春用の原稿を年末の多忙中に執筆、その中に薫風選でおなじみの電波新聞「賀状雑感」がある。

▼谷垣史好氏（松原市）は12月27日、かねてから静養

中の腎臓で入院。江城修史氏が見舞ったところ元氣だった由。

▼いずも川柳会や、柳々会から寄せ書き拝受。

▽2月の句会△

▼わかやま・しんぐう合同句会（八日・九日南紀湯ノ峯温泉で開催。別掲参照）

▼菜の花句会（十日午後六時から—題は—二階・手帳・寒（よみこみ）探す。会場はボールパンダ三階会議室（近鉄八尾駅下車東北へ二百米）

▼南大阪川柳会（二十日午

中の腎臓で入院。江城修史氏が見舞ったところ元氣だった由。

▼いずも川柳会や、柳々会から寄せ書き拝受。

▽2月の句会△

▼わかやま・しんぐう合同句会（八日・九日南紀湯ノ峯温泉で開催。別掲参照）

▼菜の花句会（十日午後六時から—題は—二階・手帳・寒（よみこみ）探す。会場はボールパンダ三階会議室（近鉄八尾駅下車東北へ二百米）

▼南大阪川柳会（二十日午

後六時から—題は—流転・リーダー・映る・土台・会場は松崎町三丁目大萬。

▼川柳東大阪は—二十二日午後六時から—題は—紐・窓・闇・つなぐ—会場は東大阪市中央公民館第二集会所（二階）

寒中お見舞い申し上げます

川 柳 塔 社

初心者歓迎

短期速成

費用低廉
内容充実

入会 随時

（規則書呈上）

大阪市南区大宝寺仲之町一丁目
誓得寺内 関西奇術教室

電話大阪〇六四七二一八

本社 新春句会

会場 文化会館

七日 午後六時

50年度川柳塔社句会の幕開きである。85氏参加という花やかな舞台となる。

まず生々庵主幹のあいさつが始発。

「路郎先生と同じ年の七十八歳になりました」としては若くて元気がいっぱいというところ。外に「日本川柳協会」の発足、内に「東野大八氏の『麻生路郎物語』の新連載と本年はまれにみる川柳発展の年になりそうである。」と力強い新春のごあいさつだった。

柳話といえは好郎氏、とは会場録音だ。人間関係の複雑さがテーマである。特に川柳人は感受性が強く、よほどその言動に注意しないと人間断絶にまで発展するなど、こころで数十句の作品が出来そうなお話である。

「やりかけたことは永続させることの重大さ」も説かれた。傍島静馬氏の連続出席二十二年は川柳塔の金字塔でもある。そして静馬調という川柳まで完成させた好作家でもある。

喝采がなりびく中で、コツコツ短冊交換の裏方さんがある。村田瓢太氏だ。また表彰状など書きものいっさいがこの人、中川滋雀

氏である。このほか幹事諸氏も早くから来て準備に大わらわだった。茶湯の用意も出ているのだが、そこまでは手が回らないのが現状でもある。だが、なんとか考えなければならぬのではないか。

本社への協力者として高橋操子氏と西出栄氏（欠席）に感謝状が生々庵主幹からわたされた。

月間賞杯は「川柳大阪」の斎藤三十四氏の佳句に輝いた。

（進行・河内天笑・記録・高杉鬼遊）

出席・太茂津・千寿子・としよ・柳志・庸佑・与呂志・静歩・千万子・多久志・たかし・維久子・一三夫・いわを・古方・葛城・酔々・悦郎・貞山・肖二・綾女・形水・滋雀・重人・凡九郎・勝晴・喜美子・生々庵・つき子・ゆきを・政次・正彰・喜風・笛生・文秋・鎮彦・儀一・メ女・眉水・美幸・花梢・鶴声・水京・好一・誓二・静馬・水客・好郎・素郎・一舟・六竜子・百酒・吸江・あいき・君子・智子・小松園・十止庵・三十四・瓢太・星斗・操子・幸代・千梢・牧人・夕花・一二三・雀踊子・珠笑・敏・幸子・一代・寿子・亜成・博泉・弥生・岳人・鬼遊・薰風・栞・南柳・柳信・一扇・頂留子・柳安子・葉子

席題「かずら」 中村ゆきを選

かつらぬぎ今日一日の鏡開ず 女
折角のかずらを似合えんと言う 素郎
あの人に知られたくない洋かずら 美幸
整形とかつらで自分を見失ない あいき

昭和49年度本社句会月間賞杯永久保持者

香川酔々氏にきまゐる

1月は塩満敏氏、2月は香川酔々氏、3月は不二田一三夫氏、4月は高杉鬼遊氏、5月は城一舟氏、6月は那須鎮彦氏、7月は10周年大会で休止、8月は葛城伊三郎氏、9月は香川酔々氏二度目の受賞で最有力者となる。10月是小島蘭幸氏、11月は中川滋雀氏、12月は藤岡花梢さん。

同年全出席者表彰

（有信新之助）

全出席連続二十二年の傍島静馬氏、川柳塔社創立以来全出席の不二田一三夫氏をはじめ、若本多久志氏、河井庸佑氏、野村太茂津氏、本多柳志氏、飛田好一氏、横地正彰氏、竹中肖二、綾女ご夫妻、西田柳安子氏、葛城伊三郎氏、児島与呂志氏、金井文秋氏、岩本雀踊子氏、大路美幸氏、笠原吸江氏、古川鶴声氏、小浜牧人氏、阪上十止庵氏、浜田儀一氏、城一舟氏、高杉鬼遊氏、板尾岳人氏。

教壇に立つてかずらか気にかかり
宝恵龍の中でかずらに気を使い
うわりとハンカチみたくな洋かずら
貴婦人に化けるかつらを撰つて
帽子ぬぐようにぬいでいるかずら
参観日かつらのママを見失い
春三日かずらへ妻が若返える
ドサ回りのかずらへ雨が漏ってくる
かずらの中味がむしゅうにかゆくなり

いかわ
吸江
古方
つき子
庸佑
生々庵
六竜子
水客
雀踊子

バーゲンに本日縁のないか
このかずら脱げば僕の恋逃げる
姥桜咲かずかずらの花もつけ
簡単に女が化ける日のかずら
端役まだかつらは要らぬ馬の脚
チャンバラの熱演かずらふり落し
女ふと視線を意識かずら
十年は若いとかずらにおだてられ
家計簿にのせられないかずら
ボソボソとかずらの話同窓会
かずらかと問うて親しきふつと消え
四十の抵抗着けてかずらの重みしる
新春のかずらで妻を見失ひ
買いたてのかずら脱いだりかむたり
若さ買う積りでかずら買うてみる
顔も変えへんかとかずら言われてる
不自然なかずらけなして世話になり
桃割れのかずら島田になる重み
太陽が一番知っていたかずら
借り物のかずらで頭下げられず
かずら買うそんな気になる人がい
かずらから女の歴史変えてみる
花嫁のかずらが重くなる祝辞
言葉までかずらをつけばもう女形
若はげのかずら売場に迷ってる
分身となつてかずらに血が通い
永遠の青年ですがかずらです

席題「寝正月」

高橋

操子選

庄助の氣持がわかる寝正月
手形氣にかかり正月寝ておれず
一二三

酔花 夕花 好一 笛生 柳次 政次 吸江 静歩 悦郎 千寿子 一舟 好一 与呂志 智女 綾女 素郎 柳信 維久子 岳人 一舟 維久子 三夫 眉水 好郎 維久子 百酒 酔花

一分間の柳論

一分間の柳論を書くよう私に廻つてきまし
たが、書けと云われても余りにも勉強不足の
私に何が書けましよう。やと月々の投句が
続いているだけ。川柳塔に自分の句が活字に
なつての嬉しさに又、今日もと投句する。
また地方の句会にも下手でも出席し他流の句
の味も食べて見たい。一句でも抜けると嬉し

主婦の座が寝正月にはしてくれず
晴れ着には縁ないくらし寝正月
控え目に生きんと思ふ寝正月
寝正月やっぱり齢だなと思ふ
寝正月腹のすいたが先に起き
寝不足の年末多忙寝正月
ボーナスをがっし抱いて寝正月
ベル鳴つておしおき寝正月
北国の雪しんしんと寝正月
寝正月テレビの歌も聞き飽きる
体重がまた増えそうな寝正月
寝正月の癖初出勤につい遅れ
元旦を寝ているらしい戸が開かず
寝正月もったいなくも肩がこり
一航海終えて故国の寝正月
明けのまで働き通して寝正月
もう酒も弱つたりました寝正月
寝正月やっぱり腹が空いてくる
寝正月びっくりさせた大ニュース
インフレに強い主婦なり寝正月
美幸 柳信 牧人 千寿子 君子 川狂子 一三夫 綾女 君子 花子 一代 雀 花子 静馬 百酒 笛生 吸江 庸佑 千寿子

藤村女

いので時間のゆるす限りどこへでもついて行
く。
若い人の解りにくい句など苦労して読み努
力しています。「命ある句を創れ」それは仲
々ですが上手下手はぬきにして情熱を持って
本当の味のある川柳が作句出来たらと努力し
ています。

孫達も引揚げこれから寝正月
飲んで寝て食うて又寝て三カ日
妻の白足袋が目につく寝正月
寝正月テレビ元旦からの事故
寝正月小鳥の餌を忘れない
ボーナスは凍結されて寝正月
寝正月にはしてくれぬ里帰りの娘
寝正月腹がへつたら起きて来る
寝正月不況を払う策を練る
寝正月とうとう男から起きる
寝正月の夢を破った娘の帰省
寝正月臨時ニュースに酔いがさめ
門閉めて子無し夫婦の寝正月
やとこさ手形も済んで寝正月
ともかくも手形で押切り寝正月
不況には勝てず正月寝るときめ
不況とインフレじつと我慢の寝正月
寝正月働くものに肩がこる
倒産の腹をくくつた寝正月
寝正月どこころか孫の馬にされ
瓢城 葛志 柳生 いわを 眉水 与呂志 鎮彦 素郎 あいき 柳志 肖二 好郎 葛城 静馬 千寿子 酔花 静馬

古年に感謝しながら寝正月 操子

兼題「始 発」

正本 水客選

始発バス貸切のような客一人 トメ子
始発まで送る女のひとえ帯 登美也
スト解除始発もたまたちあかず 文秋
始発待つポケットで温めている計報 智子
まだ勝ち目ありそう男の急ぐ始発 弥生
近つかないで私の城はまだ始発 小松園
子が生れ俺も人間始発出る 凡九郎
アイスボックスとゴルフバッグの始発出る 吸江
酔狂な寒の始発に釣天狗 儀一
今日も又おなじ顔が乗る始発 操子
顔なじみばかりの始発のかしなく 吸江
おなじみの客に安堵の始発出る 重人
弁当のぬくみと乗った始発バス 喜美子
始発に乗る日は起こされずに起きる 智子
半日ストの始発お日さま笑って 君子
始発へ静かに起きてた台所 雀踊子
始発バス誰か微醺を漂わせ 素郎
つり竿と山の男が居た始発 岳人
見送りのいらぬ始発は週刊誌 いわを
始発に乗って上手に眠る癖がつき 葉子
黙々と乗って始発で横になり 操子
始発から口笛吹いて若い人 勝晴
始発に乗れず連絡悪い旅となる 綾女
ローカルの始発ごろんと寝たくなる 美幸
始発いま夜の汚れを突き破り 好郎
アイシャドウ始発の顔に馴染めない 夕花
星ひとつひとつを始発消しながら 素郎
始発待つ雪の深さを口にせず 水客

兼題「跳ねる」

菊沢小松園選

雪の上跳ねる兎は的となる 章雄
新妻の悲鳴油が跳ねただけ どんたく
右へ跳ね左へ跳ねて師走過ぎ 茶人
跳ねまわる兎に春の草がのび 登美也
目覚しが止まった朝を跳ね起きる 宗義
組板の鯉の度胸はもう跳ねず 一栄
びよんびよんと跳ねる風の児風の孫 祥月
物価ばかり跳ねてくらしに息が切れ 好一
跳ねかえる言葉のとげがつきさきり 一二三
兎飛びして少女のスタミナこぼれそう 水客
跳ねるだけ跳ねてみずが餌になり 葛城
跳ねる上迄は待てない株を持ち 吸江
生活のかかる始発を跳ね起きる 花梢
跳ね太鼓余韻を抱いて追い出され 文秋
物価跳ねる爪先から冷え込んで 好郎
冷凍を本職跳ねた鯛にする 吸江
天ぶらが跳ねた位はしれたもの 一舟
明いと跳ねつ返りが先に嫁き いわを
のれん跳ね上げて儲ける顔で出る 十止庵
太陽へ雑草の種跳ねている 岳人
放つといて欲しいと返事跳ね返えり 牧人
シルエットはねてはもう歩きよう 葉子
あきらめた姿でえびはもう跳ねず 柳志
書き初めの力いっぱい跳ねてある 水京
どうせ凡人跳ね上ったか知れ 静歩
とび跳ねた方から刺身にされる羽目 ゆきを
箱の中兎は跳ねること忘れ 笛生
跳ねかえりとほえない晴着の裾さき 夕花
生活の汗太陽を跳ねかえす 六竜子

兼題「賀 状」

若本多久志選

跳ねているところを見染められていた 素郎
跳ねているあいだは帰るのも忘れ 素郎
海老はねる姿で女うずくまる 水客
泥跳ねた車市政を憎んどこ 笛生
思いきり跳ねて見たいな車椅子 千梢
もう跳ねぬ女になった艶ぼくろ つき子
幼稚園跳ねて転んで歌になり 三十四
跳ねすぎた兎月から落とされる 鬼遊
鯛糸のそばで大きいのが跳ねる 唐佐
釣れた姿のままを串にされる 斎雀
雪原に放てば跳ねる兎です 智子
跳び上るつもりで構えるかぶりつき 小松園

新年の音で賀状の束が来る どんたく
みちのくの雪の深さの年賀状 登美也
舞い戻る賀状が一つ松がとれ みどり
賀状書く心が文字を初春にする 一二三
焦っている女へ甘い甘い賀状 つき子
婉曲に想いのをのべる年賀状 天笑
年賀状来るべき人から来た安堵 重人
友達はいい名をもてり年賀状 智子
墨香る賀状に過去を消していく 十止庵
その顔へほほえみながら賀状繰る 百酒
ほんとうの年賀状書く御元日 操子
耳だけで兎とわかる孫の賀状 千万子
賀状きっちり悪友の義理堅く 三十四
ライバルの賀状肩書ふえている 十止庵
ふれ合いの一べんきりという賀状 花梢
賀状から焼けばついに火をつける つき子
惚れている賀状はつれい文字で来る 与呂志

降る雪の音が聞えて来る賀状
 思い出せぬ人にも賀状返しとく
 また元の旧姓できた年賀状
 賀状いま着いた男がやって来る
 蔵っておく賀状楽しく分けける
 高ついた温泉宿から来た賀状
 つけ残るバーが見事な賀状くれ
 玉露いれて妻の賀状を選び分ける
 寒中見舞賀状代りにして久し
 暮勿々賀状は初春の顔で書き
 美しい賀状の主は無名なり
 筆太く賀状の白へたたくつけ
 先生の賀状はいつも頑張ろう
 松の内恩師の賀状床にかけ
 又一人増えて円満な賀状くる
 肩書ズラリ抜けない賀状くる
 年賀状へ吾が悪筆の哀れとも
 お寺から法事でっせと来た賀状
 添え書の賀状の余韻が温かい
 友情の細々つづく年賀状
 絶筆となった賀状へ香を焚く
 一筆を加えて賀状あたたかい
 遠洋の父の賀状の香り抱く
 初孫の出来た添え書きした賀状

兼題「祭り」 西尾 菜選

観光ブックに載って祭りが派手になり
 せなの子も足をふんばる祭り笛
 ふる里の祭りテレビで見る飯場
 お祭りに帰ったままで帰農する
 秋祭りかけ落ちてから三年目

背広着て神輿かつがぬ子が帰る
 祭りからグレた息子は帰らない
 故郷の祭りを持たぬ旅子役
 酒強いイトコはとこが寄る祭り
 ビル街の渡御五階から拝んどく
 村祭り美しい誤解のまま別れ
 原点到に戻り日本の祭り知る
 しろしめす祭りへ日本の血が流れ
 青い目がよくこぶ祭のよいお国
 祭客かねて見合の席となる
 祭りの幟が見える峠茶屋
 港祭へドロの海の花火船
 男冥利の祭り太鼓の乱れ打ち
 刀鍛冶フイゴ祭は昔で
 お祭りを面の中から見るおかめ
 孫つれて亡母に逢えそうな村祭り
 肩上げをとって祭りの灯に染まる
 わび入るチャンスは祭りにきめておき
 転勤のまつりになじめず遠くみる
 文化祭悟りすましたプロگرام
 食べるから飲むから祭りと云う気分
 豊華原瑞穂の国は祭り好き
 寡婦として今年の祭り囃し聞く
 追憶は佗びし祭りの笛太鼓
 前夜祭などとブランは飲む話
 触れあった動きがこわい宵祭
 ええ話むし返えしに来た祭りの夜
 祭ばやしが旅を独りの夜にする
 ふたありだけのお祭りにする雪がふる
 宵山にもまれる老母の肩を抱く
 この土と生きて祭りの酒を酌む

十止庵
 多志
 雀踊子
 笛生
 水京
 弥生
 岳人
 静歩
 眉水
 とし代
 誓一
 好二
 滋雀
 鶴声
 酔々
 生々庵
 夕花
 千梢
 喜美子
 小松園
 武助
 多志
 千寿子
 百酒
 一三夫
 柳信
 水客
 天笑
 静馬
 一三夫

馬鹿囃子江戸の生れもいる飯場
 ねぶたへの期待パートの手がはずむ
 お祭の先頭父の生きがい
 祭だけが楽しいと知る左遷の地
 (河井庸佑・整理)

★「聴診器」刊行記念句会について

北川春果氏の句集「随筆集「聴診器」」の発刊祝賀の宴を恒例の「新春オメデトウ会」に合流したいと、生々庵主幹は幹部諸氏のプランだったが、春果氏はまだ歩行練習の段階にあり、氏から出席を遠慮したい旨を申込まされた。

では二ヶ月会を「刊行句会」に、ということになった。だが春果氏は主治医に相談されたところ「まだムリをしてはいけない」とのこと、刊行記念句会も残念ながら見送ることになったのである。

春果副主幹は、これらのことを非常に感激されているが、今は養生につとめておられるので、ただただ感謝の意を伝えてほしいとのことだった。

「聴診器」は好評である。これが氏の全快祝いとなったことをお喜び申しあげる。ーF



▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。書式は発表誌のように下三マスに雅号。

川柳ささやま

河原みのる報

飲んでいる時のフアイトが欲しい部下 可住
フアイトへ内助と名づくネジかける 近江
苦吟する静かにフアイト抱きながら とんぼ
重役を一等兵にする軍歌 宗珠
手馴れたる仲居軍歌に変えた令 英断
復唱の軍歌はつづく陽は赤い 生郎
ふと耳へいくさを知らぬ子の軍歌 つや子
ささやかな寸志でぬくもる令になり 拓
真心を固く包んだ助け合い 八陣
人を焼く煙三丈とは延びず 無鬼
猪でない証拠に煙立てておき みのる
夜風まで辞職の背をあざ笑う 越山
金策の成らず夜風に枯葉舞う 素水
湯の街の夜風理性を失わせ 喜美代
すずめ飛び散り電線細くなり れい子

菜の花句会

美幸報

贈物今年は肩書き付けて有り 鶴声
追うから逃げるそんな女と知って追う 十止庵
シナリオは踏切り睨む所作五秒 鹿蔵
鐘の音を寸断にする雪の舞い 薫風

踏切の途中で米の底が抜け
顔色を変える素直さ咎めまい
唇には書いてなかった別れの日
雪が降る暦の中の知らぬ町
十二月河童に甚平贈ろうか
ダイヤ贈られてから運命線が狂い
左遷の地踏切多い町と知り
山寺の鐘は戦に征ったまま
服変えてひとり女の靴の音
ライバルを追うずらだちのコップ酒
誤診とは言わず薬を変えました
激動の世代で暦うとまれる
来年の暦へ来年の僕を聞いて見る
踏切で別れましようと思ひ
早鐘のように芽ばえた恋ごころ
心入れかえて故郷の駅に降り

京都・塔の会

松川

杜的報

詩を受すラッシュの渦の中に居て
虫供養閣から生れる火を思ふ
流れゆく雲へ人生かけてみる
人間の弱身はやはり金にふれ
冬川にうつりし星はまたたかず
初恋の顔マネキンにあり歩を止める
小春日和へガラス窓が小さ過ぎ
正常に動きニュースになる新幹線
鍋の湯気見計るように酒が来る
動くのがやつとのような肥りすぎ
感激の肩組んでいるゆれていく
少しずつ動き停滞まだ続き
高下駄が今も生きてる法善寺
フライングダー枯葉の音も入れたくて

鬼遊 弘生 遊 夕花 々々 醉々 岳々 美幸 榮子 史子 悦郎 綾女 福水 肖二 凡九郎 哲二 紀美代 誓二 杜的報 誠史 和友 明代 季贊 笛珠 耕三 求芽 直治 英断 蘇断 飛鳥 王的 杜的

駒つなぎ川柳会(大阪市)岸
ともしびはあたたかくする家の中
金のことねばる話がもつただし
締切った窓口急患が来てねばり
宴席で共に帰ろとねばる人
大物を釣りあげるぞと大公望
セイルスマンまた来た家ではばって
文春にねばる首相がぬぐ兜
長いこと住んでいますと立ち退かず
ちよっかいに尚大胆になる二人
ちよっかいをにしたに女随いて来る
ちよっかいを出して淋しい人にする
ちよっかいに本音をまぜて酔っている
ちよっかいを出した我が子が先に泣き
ちよっかいで後仕末までさせられる
ちよっかいが酒の上とは云い切れず
ちよっかいを待っていましたという女
いよっかいへちよっかい出して巻き込まれ
ちよっかいを本氣にされてうろたえる
衣食住足ってちよっかい出したがり

岸和田川柳会

植山

錆びた釘日曜大工が手を叩き
錆びついたローカル線に遊ぶ山羊
錆びている古物宝物らしく見え
耳持って提げれば鬼手を合し
名月へうさぎやっぱりいてほしい
夢があつた月にうさぎの居た頃は
相性はうさぎ生れの姉女房
葉をもがれても赤い顔して庭の柿
適令期男の嘘にひっかかり
母の研ぐはさみは錆をとっただけ

南柳報 弘子 南部 茂子 育園 昌美 規一朗 多津緒 肖二 美彦 信義 石捨 綾子 安子 儀一 柳信 小松園 武助報 加仙 香珠夫 武助 葛城 春栄 つゆ子 南風郎 しんや 白光子 操子

川柳たましま

稲田

豊作報

長男の重さを配る鏡餅

稲田

豊作報

例のない日に福音を告げられる

稲田

豊作報

邪心なき児の手に鳩の群がれり

稲田

豊作報

選手権明日の保証はしてくれず

稲田

豊作報

政策に頼らず黄金の波を打つ

稲田

豊作報

歩け歩け俺は若いぞ付いて来い

稲田

豊作報

真実を告げる男の太い眉

稲田

豊作報

かえり道忘れて青い鳥を追う

稲田

豊作報

家を出る長男山を振り向かず

稲田

豊作報

ひたひたと寄せる眉間の深い皺

稲田

豊作報

長男の弱気を叱る赤電話

稲田

豊作報

この網をたぐると政治が見えてくる

稲田

豊作報

椅子一つ追うて人生たそがれる

稲田

豊作報

客寄せの目玉商品だけを買い

稲田

豊作報

小心を酒の力で寄せつける

稲田

豊作報

本当の自分に戻る幕が下り

稲田

豊作報

長男に相談をして気が和み

稲田

豊作報

吉永川柳社（岡山県）

平井三子子報

豊作報

うわべだけ感謝を送る包装紙

稲田

豊作報

壁かけの変体仮名になやまされ

稲田

豊作報

殉職の刑事に悲しい感謝状

稲田

豊作報

抵抗は値上げへ儉約すると決め

稲田

豊作報

有るものが有って感謝の日日が過ぎ

稲田

豊作報

床の間にトイレの壁の運不運

稲田

豊作報

惜しい菊古洋傘で労わられ

稲田

豊作報

国宝級の壁にも少々しみがつき

稲田

豊作報

憎しみを愛に変えたい日の苦悶

稲田

豊作報

ささやきのうそも聞き飽く部屋の壁

稲田

豊作報

黒板で足らずガラスに書く八百や

稲田

豊作報

千翁

稲田

豊作報

豊作

稲田

豊作報

麗水

稲田

豊作報

三幸堂

稲田

豊作報

誠一

稲田

豊作報

流風

稲田

豊作報

克枝

稲田

豊作報

注意書下宿の壁に多かりき

大成

生酔の耳がとらえた言葉尻

大成

秋深し老母の背中丸うなり

大成

育てるすべ知らず産むことだけ覚え

大成

孫が出来たの壁を破る父

大成

いきり立つ虎を押える年の暮

大成

値上げには負けて節約ムードなり

大成

西東感謝の両手母達者

大成

男の人生七つの壁をつき破り

大成

愛情の壁が非行を食いとめる

大成

城北明朗句会

川口

野の草を食べた昔は蒼い空

川口

又事故か野井戸に人がたかつて

川口

秋の野はスキが我がもの顔でいる

川口

火をかこみ歌う野営にタンバリン

川口

笑う度金冠かくす手にダイヤ

川口

野仏の往き来の人を見守りて

川口

草野球ヤジがとびかう味が

川口

万国旗ひらめくここの日の丸旗

川口

さわやかな風を呼ぶ野道をぶらり

川口

野面吹く風に尾花は西東

川口

老いの自覚ひらめきをメモにする

川口

秋の野面雀集団討論会

川口

高知川柳社（高知市）

川竹

読書する正座の父にある威厳

川竹

寝つかれぬことも又よし読書秋

川竹

貢くそろそろ眼鏡欲し朝に歳

川竹

名作へ引きずり込まれ朝を寝る

川竹

新刊書読んで昭和の知恵をつけ

川竹

七十の読書が妻に笑われる

川竹

品切れで子供の夢のそれっきり

川竹

大義

大成

宗輝

大成

一仙

大成

水仙

大成

武夫

大成

久米雄

大成

カロリーが品切れですと冷蔵庫

寛章

音のない部屋で座禅を組んでいる

寛章

ステレオの音が家主の気に入らず

寛章

送葬の列へ寂しく夕焼ける

寛章

指切りの児た焼けの中居る

寛章

秋を着る女鏡に背を伸ばし

寛章

秋の陽へ亡母の恋を許す刻

寛章

婚約の瞳にふれる秋の柄

寛章

空つ風落葉に一夜の宿がなし

寛章

大盃に挑む自信の深呼吸

寛章

旅のよき朝湯掘騰して遊び

寛章

打ちあけはてして一番星見つけ

寛章

川柳東大阪

竹中

仏壇の熱八等にある嘆き

竹中

今咲いた花仏壇へ一つ切り

竹中

仏壇が見てはるてんご止めなはれ

竹中

仏壇の声母だけが聞きわける

竹中

佳句地10選（前月号から）

竹中

竹内翁童選

竹中

ガラス切る一直線の音さやか

竹中

他人の夢ばかりが落ちていた酒場

竹中

かなだけの母の手紙に動かされ

竹中

老いてなおファッションブックに目を通し

竹中

断ち切った過去がくすくす嗤い出す

竹中

人間の欲は鶏まで闘わせ

竹中

どの道も勝負の世界プロがいる

竹中

竹べうで掘って歴史の嘘あばく

竹中

産声をあげてしっかり主張する

竹中

採算と別に稲穂を見てあかぬ

竹中

青居

竹中

寛章

竹中

恭一

竹中

十面子

竹中

松風

竹中

二風

竹中

マコ

竹中

天知

竹中

遺言の酒仏壇に欠かさない
 仏説の中に昼寝の功德など
 昼寝から覚めてアタフタ市場籠
 南無如來尼の昼寝を見てござる
 金魚売りゆっくり昼寝させる声
 氣前より出された金に手がにぶり
 にぶい者同士金婚つがなし
 白紙委任そんな怖さを後で知り
 エブロン白さで朝を活気つけ
 ハンカチの白さで愛情たしかめる
 氣ちがいが白いチョークを持ちたがり
 滝のぼる鯉にはなれぬ平社員
 ポンコツになって夫婦のさしむかい
 ポンコツに付添えつけて留守居させ
 ポンコツはボンコツなりの灯を炎やす
 ポンコツへ肩書きだけの役がくる

南大阪川柳会

金井

文秋報

酔々 方々 肖二 湖風 鬼遊 好一 美幸 誓二 季賛 思月 小松園 儀一 あいき 一栄 維久子 十止庵

色彩を持った野心が透けている
 年金を受ける身になり主義を替え
 花時計冬はさびしい彩に見え
 秋の野の彩り滅びゆくものか
 ガム噛んでおやじの主義へ無表情
 屑籠も丹念に見る娘の家出
 川柳しんぐう 大矢 十郎報 柳 信
 菊の香へひらひら蝶の舞い納め
 ひらひらと木枯びらを持てあそび
 ひらひらと干場いっぽい秋の空
 札束をひらひらきつて値切りよう
 すべらせた言葉をひろつてくれた母
 すべってから地声になったハイヒール
 うっかりとすべった口に目のやり場
 すべり台もう一回の子が登る
 横すべりしている平の人間味
 横すべり台下に母の手待っている
 ただすべりだけへビエロの芸の幅
 切られても木株の意地は根を伸ばし
 ひとかえわが全財産の膝の株
 年よりの株に託したわが余生
 坂道の切株いこいの椅子となり
 すべるのを覚悟で受ける二三校
 うっかりと口をすべらすお人好し
 処生訓すべって転ぶ術もあり
 ひらひらと落葉おち葉となるさため
 待ちわびたベンチへ枯葉ひらひらと
 頭株何かにつけてよく威張り
 オエスケー川柳会 大坂 形水報 博泉 千夢

凡九郎 万里 千生 弘一 柳 信 十郎報 千寿子 佐知子 まさ子 十郎 雀踊子 里美 与呂志 弘生 武雄 操 大輪 明 入道 としよ 幽仙 湊水 金松 富子 とよ子 健吉

風吹けば風に任そそのれんゆれ
 赤電話定期忘れたもってこい
 俄雨洗濯入れてと赤電話
 モンタンは青い落葉をどう喰う
 質屋のれん入る時より出る気兼ね
 恋心落葉とともに夢破れ
 落葉見て天下を知った人もある
 落葉にもムードがない不景氣
 葉の落ちた枝にいま虫ぶらさがる
 まだ買うな次のバーゲン安くなる
 店じまいと云うバーゲンがまた続き
 インフレが続くバーゲンも続き
 母一人が守ったのれんに背を向ける
 銀行がのれんをかたにしたら時代
 庭石の落葉石の歴史秘め
 のれんからの顔へ女形が毛を止め
 逢う場所を聞かずに切れた赤電話
 いすも川柳会 坂垣 草丘報 正子 鶴丸 芳正 遙児 正朗 きみ生 郁生 独仙 芳子 晴月 和子 朱紅

榮聖地 重也子 上田 文川弟 中野 駒村 秀川 文川兄 前田 常夢 亜成 一扇 形水 弥生 好郎 入仙 弥生 好郎 草丘報 正子 鶴丸 芳正 遙児 正朗 きみ生 郁生 独仙 芳子 晴月 和子 朱紅

銀行へマダム素顔の用があり

北国の悲恋は馬そりで去って行く

暮れの帰途馬は一気に坂を駆け

十円余って銀行員帰られず

銀行の一人が見抜くモデルガン

セールの意気に押された京呉服

どんぐり川柳会 谷垣

火をつけた女特等席に居り

ダイヤルを静かに廻す火の女

送り火を燃してわたしを慰める

天皇にいつまでもあるカマドの火

京なまり炎の女とは見えじ

罪見つめ千年燃える小さな火

再会の女が埋火かきたてる

冬の夜女ひとりの種火抱く

火祭りの僧弁慶に見えてくる

火の車らしいとあらぬ噂立て

鉄の火と芒の炎男と女

燃えつきていない証憑は風を待ち

火の粉はらって噂の渦を又ひらげ

火の車の家へもどつとくるチラシ

どん底の心に愛の灯は消さず

ハワイ川柳ウイロー社 林

儲けたら帰るつもりに孫曾孫

儲けにもならぬ論議にいがみ合い

今日を無事もうけて帰る足輕し

倉庫から倉庫へ移しては儲け

やりくりをしても儲けたような顔

儲からぬ仕事だけれど人のため

儲け口うっかり乗って皆取られ

一儲けしたら帰るが五十年

河南

青湖

代仕男

見男

京斗

緑之助

天笑

鬼遊

いを

岳人

凡子

美幸

好郎

弥生

醉々

真砂

薫風

小松園

吸江

喜風

喜風

喜風

喜風

喜風

喜風

喜風

喜風

喜風

喜風

喜風

喜風

落ちぶれて健康だけがもうけもの

七転び八起きで儲け楽隠居

噂では儲けていても火の車

儲け話若いならばと聞き流し

落魄の愚痴は儲けたその昔

インフレをよい事にして一と儲け

そろばんに合う筈なのが食い違い

人間の慾もうけても儲けても

無経験もうけどころか穴があき

儲けたが一引き二引きでつまりゼロ

千金を夢見た果てがこの姿

実直に儲け年々家ふやし

おとなしくしてれば他人に儲けられ

川柳大阪

児島与昌志報

前売りを二枚女を誘う肚

表彰のリボン同伴の妻につけ

一人旅秋を見つけた駅で降り

一億の一粒僕も生きている

前売りの新幹線がまた遅れ

平和の鳩を貨物駅はもて余し

民謡が十月の心配吹き飛ばし

民謡を唄えども本番でも無し

前売りで並んで本番でも亦ならび

カタログを揃え大安近うなり

貫録の芸に前売り売り切れる

ささやかな抵抗中年レモンを囁る

反抗はしても心配してくれる

自惚れのきつかけとなる天一句

前売りに神様の客並はせる

展示会出でカタログは丸められ

妊婦堂々未婚の母になり

小雪

雪女

風影

蒼蛇棲

快夢楼

草海

カロ女

エス子

椰子郎

細民

一葉

暁舟

暁舟

暁舟

暁舟

暁舟

暁舟

暁舟

暁舟

暁舟

暁舟

暁舟

暁舟

暁舟

暁舟

暁舟

暁舟

暁舟

暁舟

暁舟

暁舟

惨敗のせめてマナーをはめてやり

お人好しあきりよっしゃと引受ける

和歌山短詩型文学クラブ 中筋三幸報

そば立てたうさぎの耳に除夜の鐘

自慢にもならぬ話をよくしゃべり

夕刊ヘスクープあわてての電話口

白兎赤い瞳で燃える恋

夕刊の話題テレビにない話題

夕刊を読んでテレビで納得し

夕刊に間に合っている屋の火事

自慢することなく四十路も早やわすか

自慢じゃないがとはつきりした自慢

悴せる耳そばだてる日の兎

フィクションがほぐんど部下へ色自慢

朝刊の誤植夕刊隅で詫び

寒中 越智 一水

寒中 越智 一水

寒中 越智 一水

寒中 越智 一水

寒中 越智 一水

寒中 越智 一水

寒中 越智 一水

寒中 越智 一水

寒中 越智 一水

寒中 越智 一水

寒中 越智 一水

寒中 越智 一水

寒中 越智 一水

寒中 越智 一水

寒中 越智 一水

寒中 越智 一水

本社二月句会

日時 二月七日(金) 午後六時
会場 大阪府中小企業文化会館(四階四一室)

天王寺区上汐町五丁目二五番地・地下鉄谷町
九丁目下車南三百米・電話七七一四〇九六
(今月の出題・板屋舟人)

兼題 柳話 若本多 久志
「蕉点」 村田瓢太選
「恵方」 児島与呂志選
「パズル」 本多柳志選
「聴診器」 菊沢小松園選

席題 三題 当日発表
会費 三百円

★投句だけの方は切手百円封入

各題三句以内厳守

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鯉谷中之町20

川柳塔社

3月の兼題 「偶活」 「追工」

残部少々—お申込み順。

清水白柳遺句集

送料共 七〇〇円

後藤梅志著

秀句鑑賞と梅志句集

送料共 六五〇円

阿万万的・松川杜的共著

句集「的」

送料共 五〇〇円

四月号発表(2月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栞選

水煙抄(10句) 菊沢小松園選

課題吟(各題5句以内)

「PTA」 小出智子選

「甘茶」 久家代仕男選

「歩道」 長野文庫選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

五月号発表(3月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栞選

水煙抄(10句) 菊沢小松園選

課題吟(各題5句以内)

「夫婦」 河野君子選

「植木」 林野麴光選

「鯉のぼり」 田垣方大選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限りま。★用紙はなるべく柳葉をご使用ください。

原稿締切にご協力を

定価三百円(送料十六円)

半年分 千八百五十円(送料共)
一年分 三千六百円(送料共)

昭和五十年一月二十五日印刷
昭和五十年二月一日発行

編集人 中島蓬太郎

印刷所 藤原童心社

郵便番号 542

大阪府南区鯉谷中之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話大阪・二七一三九八五番
振替口座 大阪・三三三八番

・ペンペン草・

★本社宛に賀状をたくさん
いただいたが今年もまた
失礼してしまいました。な
にせ毎年元旦から初出まで
二月号の編集のため、ど
うにもなりません。おわび
申します。二月号の原稿を
印刷所へわたしてからばく
の正月になるわけです。

★編集会議（第一回）
★新年号の初校の出た日が
編集会議になった。いま
つた。ついに一日校正をおく
らせてしまうことになっ
た。（12月18日）

★この日、集った人、戸田
古方、橋高薫風、児島昌
志、板尾居人、河内天笑諸
氏に、新加入の山本素郎、
高杉東遊、香川酔々諸氏に
ぼくの9名。

★いろんな案が出されたが
すでに他社でやっているも
のは敬遠することにした。
また本誌は五十年の歴史
があるので、ある程度の伝
統は固守せねばならないか
ら、そう簡単にわが社のカ
ラーを一変するような冒険
はできない。

★吟社が購読者獲得のみに
走るから作品が低下すると
か、いろいろ理想論があ
る。だが結局は購読者にそ
うばを向かれたら一巻のお
わりとなる。

★かつて路郎先生が「雑誌
を厳選して、同人作品を毎
月10句か20句ぐらいにし
てしまおうと、世に誇る川
柳だけ残るのだが……。そ
んなことしたら本が売れな
くなるだろうな」と、いわ
れたことを思い出した。ま
た、「句会で、きょうは採
る句なし」といって全没に
してしまったら、路郎横暴
と騒ぐだろうな」と、笑
いながらつけたされたこと
だった。

★それはさておき、みなさ
んの発言は、いちいち記録
しておいた。

食べすぎ・のみすぎに 新タケダ胃腸薬



効能＝食べすぎ、のみすぎ、胸やけ、二日酔
い・悪酔いによるむかつき・はきけ・嘔吐に
効く
☆3割錠→27錠・60錠・150錠 全粒粒→16包・40包

葉子コーナー

▼12カ月の内、短日なの
に一番長く感じ嫌いな月
は2月です。雪国の竜巻
は砂と違い目は余り痛く
ありませんが、冷たく一
瞬息が止まります。カブ
セルのようになっています
と、竜巻の中で回転して
いました。私も入って
遠くへ行きたいと子供の
頃真剣に考えたものです

北川春巢著 隨筆と句集

『聴診器』

送料共
千四

発行者 〒573 枚方市澤東町二九一二
北川春巢
取次 川柳塔社

『東宝映画撮影所』へ行っ
たり、動物園にも出向いた
りしたものが、こうした
方面にも進出してみたいと
おもっている。

★一月句会の婦りに、古方、
薫風、天笑、酔々、鬼遊、
新之助、素郎、居人諸氏に
ぼくの9名が集った。活発
な意見の交換で、第一回の
ときとは変わり、お互いに
「同志」というのがやさし
いうちに会議が進ん
だ。大久保彦左衛門の古方氏
は足が不自由なので苦勞
さまでした。

★「麻生路郎物語」はガゼ
ン大好評。さすがに筆の人
である。プロフェッショナ
ルの本領とはこういうもの
であろう。一月の中旬とい
うのに、すでに四月号の分

★原稿は右肩の上部にホッ
チキスで止めるのが常識で
ある。二つ折りにして本の
ように二か所も止めるのは
やめていただきたい。それ
から左側に止めるのもこま
る。洋書ではないからだ。

★書き直す時間がないため
便せん原稿が少なからず
おくらにはいつている。ご
協力ください。

（不二田一三夫）

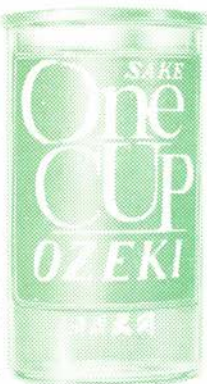


ワンカップ大関

大関酒造株式会社

コップにはいったお酒

清酒一級(180度) 100% ジャケットパック5本入り



田宮二郎

人気と実力で独走中

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ!

豚 焼 餃子
 叉 焼 饅頭

豚まんの王様、やき豚入り



大 阪・なんば



TEL(641)0551-2



<出張店> なんば高島屋/虹のまち鹿鳴/心斎橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋
 京阪デパート/堂島地下センター/中之島サン・ストア/なんば新川店/奈良近鉄百貨店